

SHINCHO

# CREST BOOKS

20<sup>TH</sup>

SHINCHO CREST BOOKS  
20TH ANNIVERSARY

新潮 Crest・ブックス  
創刊20周年

FREE

ご自由に  
お取りください。

## 海外文学の ない 人生なんて

### INTERVIEWS

トム・ハンクス  
ミランダ・ジュライ

### DISCUSSION

角田光代×小川高義  
×松家仁之

### COLUMNS

ただいま翻訳中!

### CATALOG

新潮 Crest・ブックス  
全点カタログ 1998-2018

	E			
	R	S		
C				T
B	O	O	K	S

Shinchosha

Shincho Crest Books  
20th Anniversary Booklet

## 海外文学のない 人生なんて

Publisher  
私市憲敬

Editor in Chief  
須貝利恵子

Editors  
前田誠一  
田畑茂樹  
佐々木一彦  
加藤木礼

Sales  
佐藤和弘  
岩崎百合

Art Director  
島田隆

Cover Work  
今井麗

Photographers  
坪田充晃(写真)  
広瀬達郎(挿絵)

Special thanks to:  
内田有佳  
武政桃永  
望月玲子  
小荒井淳子

2018年8月25日

発行所 株式会社新潮社  
〒162-8711 東京都新宿区矢来町 71

電話 編集部 03-3266-5411  
営業部 03-3266-5111  
広告部 03-3266-5211

印刷・製本 錦明印刷株式会社

©2018 SHINCHOSH A  
法律で許可された場合以外に  
本誌からの無断転載、コピーを禁止します。

## contents

### interviews

せめて無害な道楽とでも言いましょうよ  
トム・ハンクス——2  
聞き手 マーク・マドリー

子どもを産むこと、小説を生み出すこと  
ミランダ・ジュライ——10  
聞き手 エリザベス・デイ

翻訳者から 岸本佐知子——18

### manga

ミランダ・ジュライ  
「あなたを選んでくれるもの」と僕——19  
矢部太郎

### topics

デビュー50周年記念。処女短篇集を翻訳刊行!  
アリス・マンロー——20  
小竹由美子

### discussion

海外文学のない  
人生なんて——22  
角田光代×小川高義×松家仁之

### ranking

新潮 Crest・ブックスのベスト20——31

### coming soon

「両方になる」アリス・ミス/本原善彦——34  
「八つの山」パオロ・コニェッティ/関口英子——36

### story

「心の中で思うこと」トム・ハンクス——39  
小川高義 訳

### book guide

新潮 Crest・ブックス  
わたしの3冊——47

### columns

ただいま 翻訳中!  
アントワース・ロラン/吉田洋之——30  
ソナーリ・デラニヤガラ/佐藤澄子——38  
エマヌエル・ベルクマン/浅井晶子——45  
ベルナルド・アチャガ/金子奈美——46  
モーシン・ハマッド/藤井光——55

### catalog

新潮 Crest・ブックス  
全点カタログ1998-2018——56



## SHINCHO CREST BOOKS 20TH ANNIVERSARY

### 海外文学のない人生なんて

〈新潮クレスト・ブックス〉は、1998年5月のシリーズ創刊から、おかげさまで20周年を迎えました。この間にお届けしてきた小説・ノンフィクション作品は、147作にのぼります。8月末には、小説家トム・ハンクスのデビュー作『変わったタイプ』と、ミランダ・ジュライの初めての長篇『最初の悪い男』という新たな2作が加わって149作に。この二人の作家のインタビューを中心に、これまでのクレスト・ブックスとこれから刊行を予定している作品への読書案内として、小さなブックレットをつくりました。創刊以来、20年のご愛読にあらためて感謝いたします。



# Tom Hanks

せめて無害な  
道楽とでも言いましょうよ

アカデミー賞主演男優賞を2度、  
ゴールデン・グローブ賞主演男優賞を4度も受賞した  
アメリカの国民的俳優トム・ハンクス。

無類の読書好きで、タイプライターの  
コレクターでもあるハンクスが、小説を書きはじめ、  
あの「ニューヨーカー」に掲載された。

さらに書きためた全17篇が、老舗の名門文芸出版社  
クノッフから『変わったタイプ』として刊行された。

俳優の余技とは到底思えない、味わい深い  
短篇小説はどのようにして書かれたのか。

(「グローブ・アンド・メール」紙 2017年10月13日より転載)

## トム・ハンクス

マーク・メドリー・聞き手

interview by Mark Medley

意外な面持ちで眉を上げた人も少なくなかったことだろう。「ニュー Yorker」二〇一四年十月二十七日号にトム・ハンクスという名前が出ていた。といってアカデミー賞を二度も受賞した俳優、映画監督のプロフィールではなく、また最新映画のレビューでもなく、載っていたのは短篇である。アリス・マンロー、J・D・サリンジャーのような錚々たる作家が名を連ねていた、いわば文芸の聖地たるスペースに、その作品が登場したのだった。題して「アラン・ビーン、ほか四名」。その名の由来となったアラン・ビーンは、月面に歩を運んだことのある数少ない宇宙飛行士の一人である。だが、この短篇は、四人の仲間がDIYで製作した宇宙船で、月まで往復するという冒険旅行の話だった。

「いままで何人もストーリーテラーとして優れた人を見てきたので、あやかりたいという気持ちもあって、自分のストーリーを語りたくなかった」。当時の彼はそのように同誌に語っていた。

それからきっかり三年後に、初の短篇集となる『変わったタイプ』が刊行された。既発表の「アラン・ビーン、ほか四名」に加えて、同じメンバーが登場するものが二篇、また無名だった役者がいきなり脚光を浴びる「光の

街のジャンケット」、子持ちの女が離婚してから生活を立て直そうとする「グリーン通りの一カ月」、ある男がタイムトラベルで何度も一九三九年の万博を訪れる「過去は大事なもの」、といったような全十七篇が収録されている。穏やかな魅力をたたえて、どこかしら過去にこだわりのある作品群であるのだが、さらに共通テーマとしてタイプライターが出てくる。ハンクスには、もう何十年も、タイプライターを集める趣味がある。

先頃、マーク・メドリーが、「グローブ・アンド・メー」紙の記者として、ハンクスにインタビューを行なった。新刊の著書について、また映画監督・脚本家だったノーラ・エフロン（一九四二—二〇二二）について、ノスタルジアについて、そしてタイプライターへの中毒——いや、関心と言おう——について、ハンクスの話を聞くことができた。

#### なぜ短篇小説を書きはじめたのか

——「アラン・ビーン、ほか四名」の雑誌発表から、三年ほどになります。当時、「ニュー Yorker」で文芸の編集をしているデボラ・トリースマンとの対談があつて、それを見る

と、さらにお書きになるのかどうか微妙でしたが、あれから事情が変わったのでしょうか？

ペンギン・ランドムハウスに「もっと書きたくないですか」と言われたんですよ。それだけ。「だったら、いくつ？」って話になって、編集担当になったピーター・ゲザーズが「どうでしょうね、十五くらい？」なんて言うんで、「おい、正気か？」と叫んじゃった。でも、だんだんその気になって、考えてみたいテーマというか、タイトル、アイデアなんてものをメモするようにになって、やってくるうちに、ええと、十五どころか、十七になっていた。そうなると今度は「どうして？」なんて言われるようになった。「どうしてこんなことした、これだけ書いた意図は何だ」ってことなんだけど、そんなものありやしない。もともとストーリーテリングに関わって生きてる。映画でも役作りをする場合は、その人物の背景となるストーリーを、じっくり突き詰めて考えますよ。ある瞬間をスクリーンに映せるように作るとなったら、その瞬間がどういう背景から出たことなのか。ちゃんとわかってないといけない。人には言いませんけどね。とくにメモするとか、打ち合わせするとか、監督と相談するとか、そんなこともなし。ただ自分一人で、その人のストーリーを考えてる。

——この本の献辞として、「ご家族に捧げるほかに、「ノーラがいたから」と書かれています。ノーラ・エフロンが「いたから」とはどういうことでしょうか？

その昔、雑文を書くようになって、よく書いている途中でノーラに送って見てもらった。「どうにかなってる？」って聞くと、「まあね、どうにか」という答えがあった。「これってエッセーなのよね。まず最初に何を言いたいのかわからせるのがいいかな。で、ちゃんと話をしてから、その話をしたんだとわからせて締めくくる。このへん直しとこうか」なんてね。そんなわけで「ノーラがいたから」と書いた。何かしら思い立つと、とりあえずノーラに聞いてみた。しかし、それは僕だけじゃないだろうな。ものを書く人はたくさん知ってるけども、「このあいだ本を出したら、ノーラ・エフロンからランチに誘われた」なんて言ってる人がいくらでもいた。ノーラは、相手が誰であれ、そういうことをしたんだ。有名人にも、それほどでもない人にも、よく声を掛けた。

### 現在への不満があるってことだと思っ

——さて、この短篇集は、全体にノスタルジアを帯びていますね。過去の時代に設定された話が多いですし、昔はどうだっ

たというような会話が出てきます。一九三九年への時間旅行をやめられなくなる男もいる。過去には癒やしがあるとお考えでしょうか？

ちょっと違うかな。そう言うのと安っぽいみたいで、ぐちゃぐちゃした感じもあって、たとえば「ああ、子供の頃に見たテレビが懐かしい」なんていうような——どうせつまらない番組だったんだけどね——。だから、ノスタルジアと言っても、また過去に戻って暮らしたいというのではなく、現在への不満があるってことだと思ってる。たぶん、突き詰めて言えば——タイプライターを面白がってる精神もそうなんで——それなりに永続するもの、正統であるものを求めるってことかな。しっかり頑張っ

て残るもの。なくならないもの。一瞬で消えるようなものではなくて——。もし家族が飛行機で旅をしたら、一応、機内での出来事が記憶になるだろうけども、家族が三日がかりで車を走らせた旅だったら、その記憶は心に刻まれて、ずっと消えにくいものになるでしょ。じんわり深く染み込んで、DNAにまで届くような。もっとも、いまどきの旅なら、みんなスマホにかじりついてたりするから、どうかわからないね。ともかく過去がどうだったとかいう憧れってことでもなくて——そんなのは時間の無駄になるだけで、それよりは不満、じゃなくて困惑かな、どうして世の中がこんなになってるままなのかという——。

A man with short, graying hair is shown in profile, sitting in a chair. He is wearing a dark blue, high-collared jacket. He has a thoughtful expression, looking towards the right. The background consists of vertical wood paneling. To the right, there is a wall with a dark, textured, bubble-like pattern. A red lampshade is visible in the upper right corner, casting a warm glow. In the foreground, a small round table holds a plate with a green dish.

ただのノスタルジア  
とはちょっと違う。  
それなりに永續するもの、  
正統であるものを求める  
ってことかな。

弾かないピアノが何台もあるみたいいな

——「心の中で思うこと」という作品では、主人公の女性が初めてタイプライターを買います。教会の駐車場での中古セールで、五ドルの買い物でした。「自身はどうだったんですか？

友だちから譲られた一台が最初でしたね。そいつがオリヴェッティの新品を買ったんで、いらなくなったガラクタみたいなのを僕にくれた。あれは一九七三年のこと、たぶんスミス・コロナじゃなかったかと思うけれども、どうだったか。ほぼプラスチックの製品だった。短篇のほうは、僕が初めて本物の一台を手に入れた話ともよになってる。ヘルメス20000とあって、あれは世界一の名品だった。

——現在、二百五十台のタイプライターをお持ちだと、どこかに書いてありました。

いや、いまはそうでもなくて、やっと百八十くらい。だって、ほら、死んだあとのことを考えると、子供たちに迷惑かけるから、少しずつ減らしてるんだ。使いもしないタイプライターが大量にならんだけ、なんてのは困るだろうからね。弾かないピアノが何台もあるみたいな。だから徐々に削減している。最終的な願望として

は、三十台くらいでいいから、どこにでも行った先に置いてある、なんていうのがいいね。そもそも自分用に一台持つてる理由だってあんまりなくなってるんだから、三台、四台……なんて必然性はあるわけがない。もう余剰兵力としか言えない。とうの昔から余剰になってる。

——それが趣味から中毒に変わったのは、いつごろです？

中毒ってことはない。せめて無害な道楽とでも言いましょうよ。「なくてもいいタイプライターを買いたくないのは、いつのことか」と聞いてくれたら、もっと面白い質問になる。のめり込んだと言えるのは、たしかヘルメス30000を手に入れたあたり。その頃だったか、「このeBayってのは、どうすればものが買えるんだ」なんて言いながら、早い話が、その一回だけで十二台は買った。どうかしてるよ。オーストラリアからも何台か買ってる。現地から発送してもらうんだけど、送料が八十五USDで、機械そのものが五ドルだったとかね。

たまらなく病みつきになってる

——その短篇の中で、ある女性がタイプライターについて「いまだき使う人なんていないかもね」と言っています。また別の話では、「現代人にタイプライターが必要なのか」というと、



## 変わったタイプ

トム・ハンクス

*Uncommon Type*

Tom Hanks

小川高義訳 590151-6 2592円

●本作収録の短篇をP.39～44に掲載

## Tom Hanks

1956年、カリフォルニア州コンコード生まれ。シャボット・カレッジで演劇を学んだあと、カリフォルニア州立大学サクラメント校に編入。アカデミー賞主演男優賞を2度、ゴールデン・グローブ賞主演男優賞を4度受賞したアメリカの国民的俳優。読書好きでタイプライターのコレクターとしても知られる。2014年に初めての小説「アラン・ピン、ほか四名」が「ニュー Yorker」に掲載される。本書が初の小説集。

木樵の斧を買って帰りたいかどうか、というくらい」とも言われます。「自身では、この趣味を弁護する必要を感じますか？

いや、そんなことない。タイプライターは輝かしくてロマンのあるもので、これに夢になることは全然おかしくない。小さい子だって、ぼつぼつと文字が打てれば大喜びするに決まってる。機械を動かしてる感覚がいいんだらうね。タイプライターには、うれしくなるような感性がある。一つのことの特化して——書くだけのものなんだな。時刻の表示は出ない。絵も映らない。電動でなければプラグを突っ込むまでもない。一日の終わりに、

こいつに向かうのが、もうたまらなく病みつきになっている。車でも、飛行機でも、ギターでも、そういう趣味に走ってる人いるでしょ。僕はタイプライター。そんなに大きくなって、どうにか持ち運べる。

——今度の作品を、タイプライターで書いたってことは？

まさか。「グリーン通りの一カ月」っていう話は、冒頭の数ページだけ、アトラントで買ったタイプライターで書いたけども。まあ、ご冗談でしょ。新聞のコラムをタイプライターで書いたりします？ できっこないよね。頭おかしくなっちゃうよ。この本を書いたのは、ラップトップのパソコン。 **C**

# Miranda July

## 子どもを産むこと、 小説を生み出すこと

大学を中退してアーティストとなり、  
映画監督としても、小説家としても、  
比類のない名声を得たミランダ・ジュライ。  
フェミニストとしても注目される彼女が  
初めて発表した長篇小説は、  
女性どうしの暴力から始まり、愛情、家族、  
死をも射程に入れた、「驚くべき」作品である。  
〔「ガーディアン」紙 2015年2月8日より転載〕

## ミランダ・ジュライ

エリザベス・デイ・聞き手

Interview by Elizabeth Day



ユーヨークのタクシーの後部座席にいるミランダ・ジュライは、タートルネックの上に大きなサイズのパーカを着ていて、フードについたファーが顔の輪郭とカーリーなボブヘアを縁取っている。スカイプ越しに話していると、ときどき日の光が窓から車内に差し込んでくる。そのたびごとに彼女は目を細め、話を中断して顔を横に向ける。まるで頭のなかで考えを組み立て直し、再びまとめているかのようだ。その瞬間に画面に現れている光景は、彼女の映画からそのまま取り出してきた一場面のようだ。オフビートな女性の主人公が物思いにふけている。その表情からは、彼女の内部で何かしらの対話が交わされていることがうかがえる。

この連想も、まったくの見当はずれということではないだろう。というのも彼女の長篇映画デビュー作である『君とボクの虹色の世界』では、ジュライ本人が脚本を書き、監督し、主役を演じているのだから。オンライン・セックスと離婚がはびこる時代の孤独と愛を描いた作品だ。批評家からは「チャタリングでオフビート」と評価され、二〇〇六年にカンヌ国際映画祭でカメラ・ドールを受賞した。

けれど、現在四十歳（インタビュー当時）のジュライは

型にはまってしまうことを恐れている。それまでの彼女は、パフォーマンス・アーティストとして名をはせてきた。自身が「ライブ映画」と呼ぶマルチメディアのインスタレーションを制作し、ロンドンのICA（現代複合芸術センター）を含む世界中の会場で公演を行なった。

最初の長篇映画で成功を収めたあと、ジュライは短篇小説集『いちばんここに似合う人』を発表する。二〇〇七年のフランク・オコナー国際短篇賞を鮮やかにかつさらい、審査員長からは「独創的な才能にあふれた一冊」と評された。

そしていま、世界各地で苦悩する作家やアーティストたちのもたらす実存的危機のうめき声に拍車をかけるように、ジュライは長篇小説まで書き上げてしまった。『最初の悪い男』はすでにレナ・ダナム（『驚異的』）、A・M・ホームズ（『必読の一冊』）、デイブ・エガーズ（『忘れがたい作品』）らによる賞賛の声に彩られている。

この本のプロモーションで英国を訪れるジュライに、私は伝えてみた。どんなことにも万能な人を手放して賞賛する習慣は、ここでは浸透していない。作家は書き、映画監督は映画を監督し、アーティストはアートを作る。ことがよしとされている。「でしようね。いえ、アメリカでも同じだから」と彼女。「正直に言う、私自身も

そういう偏見を持っていると思います。すべての分野でその人を本格的な作り手と捉えるのは、確かに難しい。あるひとつのことにだけ専念して、そこで飛び抜けていくくれるほうが、その人が本気なんだと信じられるから。ただ言えるのは、さまざまな媒体を行き来しながらアートを作るのが、私にとって自分らしいやり方だということです。とにかく最初からずっとそうなので」

### 「ジュライ」になるまで

ジュライはカリフォルニア州バークレーで育った。彼女の両親、リンディとリチャードのグロッシンガー夫妻はオルタナティブな健康法やスピリチュアルなテーマの本を扱う独立系の出版社を経営していた。家庭のなかで、彼女と兄のロビン自分たち自身で楽しみや遊びを作り出すように育てられた。「兄が裏庭に私たちだけの小さなお家を作ってくれました。二階建てで、水の設備もあって」彼女は思い出す。「ふたりで一緒に家を作って、家具をデザインしたんです。そのおかげで、どんなものでも自分たちで作れるんだ、と思うようになって。両親は買い与えてくれなかったから、とにかく何でも自分たちで作る方法を考えました」

その後ジュライはカリフォルニア大学サンタクルーズ校に入学するも二年で中退し、オレゴン州ポートランドに移り住んでパフォーマンス・アーティストとして活動を開始した。このとき、「自らを再構築する」フェミニスト的行為として姓を「ジュライ」に変えている。友だちと作ったファンジンに登場させたキャラクターからとって、自分自身に新しい名前をつけたのだ。

『君とボクの虹色の世界』が成功を収めたころ、彼女は不安に苛まれていた。それ以前にやってきたこと、これからやろうとしていることがこの成功の影にかすんでしまっているのではないか。「みんなが私のことを映画監督だと思っている状況に、どこか居心地の悪さを感じていました。だからこそ短篇小説集をすぐに出版して、この認識を払いのけなければ！」と考えて「彼女は少し皮肉っぽく笑い、そして心からの思いをつけ加える。「別の見方をしてもらうためには、実際に別の何かになるしかないでしょう」

短篇集の出版のあとに続いたのが、新しいプロジェクト『ウィー・シンク・アローン』だ。著名な友人たちを巻き込み、過去に送ったEメールを十万人の登録者と共有するという試み。参加したのは女優のキルステン・ダンストや作家のシェイラ・ヘティ、そしてレナ・ダナム

などの面々だ。ダナムがアシスタントに返信したメール——二万四千ドルのソファについて「やっぱり値段が高すぎると思う」——などが共有された。

『ウィー・シンク・アローン』は、現代の窃視症的な文化のあり方について示唆的な考えを促す目的で作られたものかもしれないが、結果的にジュライの周辺のネットワークの豊かさを提示することにもなった。ダナムとヘティは仲の良い友人だ。もうひとりの仲間であるポップスターのロードも、最近ツイッターで『最初の悪い男』がいかにも「すばらしい」かを三百万人(当時)のフォロワーに向けて発信した(ジュライ自身にも五万九千人という膨大な数のフォロワーがいるが、ツイートするのは「身がすくんでしまう」と言う。「昨日は自分のツイートのなかの『三』の使い方が正しかったのかどうか、思わず調べました。違ったんじゃないかと急に心配になった瞬間があつて。私にとつては、のびのびとした気持ちでいられるメディアではないですね」。

それでもやはりツイッターなどのおかげで、フェミニストになるにはいい時代が来ているとジュライは考える。「何よりも女性たちがお互いをサポートしあっているし、ソーシャルメディアがそのつながりを強力なものにしている。勢いみたいなのがあります。そしてみんな

ながその威力に気づいている。へわあすごい、この女性の人生に実際にこんなインパクトを与えることが、この私にできたんだ」と思えるのは本当に嬉しいですよ。誰かの書いた実験的な詩集が売れるようにすることだって、私にはできるんだ! とか」

とはいえ、ジュライにもアンチはいる。彼女には、素直な熱心さゆえにターゲットになりやすい側面もある。ジュライの作品への反応は両極的だ。『君とボクの虹色の世界』で描かれる優しく不器用な人間関係に感嘆する観客がいれば、二作目の長篇映画『ザ・フューチャー』(二〇一一)に登場した喋る猫を、ポストモダンのな似非の深遠さの最悪の典型例と見て、おぞましいやり過ぎだと感じる者もいる。

### 「へんてこ」というレットル

これまで、あまりに繰り返し「へんてこ」とか「不思議ちゃん」と呼ばれてきたジュライはさすがにうんざりしている。加えてこれらの形容は明らかに、女性たちを上からの視線で言い表したものだ。「そう、確かにへ不思議ちゃん」なんていうのは矮小化を狙った言葉としか思えない」私がそのことについて聞くと、ジュライはそ



う答えた。「そのことについての質問は、まるで自分についてゴシップ話をするようにと求められている気にもなりません。自分についてのゴシップを自分で話すことを求められるような状況こそ、女性特有のものかもしれない。だから私はもう、その話はしたくないのかも」

『最初の悪い男』を形容する言葉はいろいろあるだろうが、それが「不思議ちゃん」的なものでないことだけは明らかだ。物語の主人公はシェリル・グリックマン。ひとりで暮らす四十代の独身女性で、護身術の慈善団体で働く同僚に片思いしている。ある日、雇用主である夫婦から彼らの二十歳の娘クリーを家に置いてやって欲しいと頼まれる。その日から、秩序と規律に満ちたシェリルの生活はカオスにおちいり始める。クリーは体格が良くセクシーで、扱いにくい（「ブロンドと小麦色の圧倒的な物量という感じがした」）。やがてシェリルとクリーは、肉体をぶつかり合わせて闘う習慣に身を投じるようになる（「廊下でクリーに口を押さえられて首をつかまれ」）、すぐにその関係は予想もなかった気配を帯びるようになる。

お互いを叩きのめして良い、という暗黙の合意のうちにあるふたりの女性たちについて読むのは、まれな経験だ。女性の肉体的な攻撃性が文学のなかで扱われること

になったことを覚えています」

### 妊娠、出産、そして執筆

主に頭のなかだけで生きていくような人間（アーティスト、作家、知識人）が、肉体を介したコミュニケーションに憧れを抱くのは、かなりよくあることだと彼女は言う。「やり返したら気持ちがいいだろうな、と妄想することはできませんから。はり倒されるだろうけど。厳しいものですよね……もうひとつ情報をつけ加えると、これを書いているときは妊娠中だったんです。だからかつてないほど、へ自分はこの体のなかにいる」という感覚が強かった。そのあとに授乳の時期が続いたので、この小説を書いている間じゅう、ホルモンに左右された九つくらいの異なる状態が入れ替わり立ち替わりして、これは内面を描いた小説だけど、肉体的な要素もそこに加わることが求められているような感じでした」

彼女の息子のホッパー（名前の元となったのはデニスでもエドワードでもないらしい。「私はどちらも好きだけど」とジュライ）は二〇一二年の二月に生まれた。ジュライの夫であるマイク・ミルズも映画監督だ。彼の二〇一〇年の作品『人生はビギナーズ』は、彼の父親が

はあまりないが、ジュライはそれを他の抑圧——文化的なそして性的な——への挑戦のメタファーとして使っている。彼女は自らを「意識的なフェミニスト」と称しているが、この作品では女性の身体性についての議論を引き起こすことを、意図的に試みているのだろうか。「私自身も、若いころは暴力が絡むような経験が結構あって」微笑を浮かべながらジュライは言う。「外に出かけて、どうしようもないことをしようとする男性がいたりすれば、殴り合いの喧嘩になることも、まったくありえないことではなかった。そういう世界にいました」

「ある友だちが誰かの頭を思わず強く蹴りすぎて殺してしまった、と噂になったこともあったなあ。本当かどうかわからないけど」自信なさ気に彼女はそうつけ加える。

ミランダ・ジュライへのインタビュ어가進む方向として、これは予想外だった。彼女はさらに「人を殴ったことがある」と認め、でもそれは「かなり前の話」だと言う。また十一歳か十二歳のころ、当時の親友と向かい合っってベンチの上に立ち「闘い」をしたことも話してくれた。「すごく親密な感じになることができたんです、それ以外ではかなり女の子っぽいふたりの関係性のなかにその行為が織り込まれることで、すごく満足感があった。怒りを爆発させることで、お互いにすごく開放的な気分

七十五歳でゲイであることをカミングアウトした実際の経験が元になっている。ジュライ一家はロサンゼルスに住んでいる。

短篇から長篇への移行は挑戦だったとジュライは言う。短篇を書くときは「ものすごく速くて、下書きもなし」だった。いっぱいこの小説は「素敵なひらめき」から始まりながらも、執筆自体は「拷問」だった。書き終えた最初の原稿を読み返し、辟易してしまったと言う。「とにかくひどい文章に思えて。でもすごく良かったのは、なんにせよ書き上げたからには物語の形をなしているものが手元にある、ということ。ただそこから書き直していくだけでいいんですから。それが嬉しかった。私からすれば、まるで映画の編集の段階でお金の心配などなしに何度でも撮り直しができるようなものと思えたんです。編集は大好き。映画を作る過程のなかでも楽しい部分です」

息子を出産したあとは、授乳しながらそのときどきの状況や考えをiPhoneで記録した。さて振り返ってみて、産み出すのが大変だったのはどちらなのだろう——小説か、人間か？ 彼女は笑って答える。「人間、かな？ そう言わないと、たぶん許されないでしょうね。でも、すごく良い意味での〈大変〉さです。人間の赤ちゃんに

は全身全霊で向き合わなくちゃいけないけれど、本を書くのは……」彼女はいったん言葉を止める。「結局は、それほどたいしたことではない、というか。うまくいかなければがっかりだけれど、すぐに立ち直れる。けれど、愛情となると……純粹に愛の深さで測られるもので、何かと比較できるわけでもない、でしょう？ 息子への愛は私をダメにしてしまう。言葉で説明することなんてとてもできません。それに比べれば、自分の書いた本への愛を語るのとは簡単。いまはとにかく書き上げられたことを、誇りに思っています」

"I had some rough episodes when I was younger":  
An Interview with Miranda July  
Copyright Guardian News & Media Ltd 2018

## Miranda July

1974年ヴァーモント州生まれ。大学中退後、ポートランドでアーティストとしての活動を開始し、短篇映画も撮り始める。脚本・監督・主演を務めた初の長篇映画『君とボクの虹色の世界』が2005年のカンヌ国際映画祭でカメラ・ドール（新人監督賞）を受賞、大きな注目を浴びる。2007年、初短篇集『いちばんここに似合う人』でフランク・オコナー国際短篇賞を受賞。2011年、2作目の長篇映画『ザ・フューチャー』と2冊めの著書『あなたを選んでくれるもの』を発表。2015年発表の本作は初長篇となる。

# ゲンジツまでは何マイル ——ミランダ・ジュライ初の長篇小説

岸本佐知子

text by Kishimoto Sachiko



## ミランダ・ジュライ 『最初の悪い男』

The First Bad Man  
Miranda July  
岸本佐知子訳 590150-9 2376円

ランダ・ジュライの三作めとなる最新作は、自身初となる長篇小説だ。

主人公は四十三歳独身のシェリル。女性向け護身術DVDを販売するNPO団体で長年働いている。職場の年上男フィリップに密かに恋心をいだき、九歳のときに出会った運命の赤ん坊クベルコ・ボンデイとの再会を夢見るが、どちらも成就の道のはずいぶん遠い。

シェリルの日常は自ら考案した

「システム」によって効率よく滑らかに運営されている。食事は皿を省略してフライパンから直接食べる。物を動かすときは同じ方向のものをいくつかまとめて。本は本棚の前で立ったまま読む、いやいっそも最初から読まずに済ませます……。

そんなシェリルの箱庭的小宇宙は、上司夫妻の二十歳の娘が転がり込んできたことであっけなく崩壊する。金髪セクシーダイナマイト、粗野で粗暴で衛生観念ゼロ、美人だけ

れどピッチを絵に描いたようなクリーだ。まさに水と油の二人が一つ屋根の下で暮らすうち、両者の緊張はついに臨界点に達し、そして――。

ミランダ・ジュライの小説の主人公の多くがそうであるように、シェリルは妄想の世界の住人だ。現実世界と自分の間に用意周到に壁を築き、“生きる”ことから逃げていく。

『最初の悪い男』は、そんな彼女がクリーという黒船の到来によって否応なしに世界と向き合い、真の人生を取り戻すまでの冒険物語、大人の成長譚だ。

シェリルの冒険の道は予想外の急カーブや断崖絶壁をはらみ、思いも寄らない場所に彼女（と読者）を連れていく。クリーとの関係は敵同士からゲームの共犯者、恋人さらには疑似家族……と二転、三転、四転し、『ファイトクラブ』さながらの激しい暴力さえも勃発する。

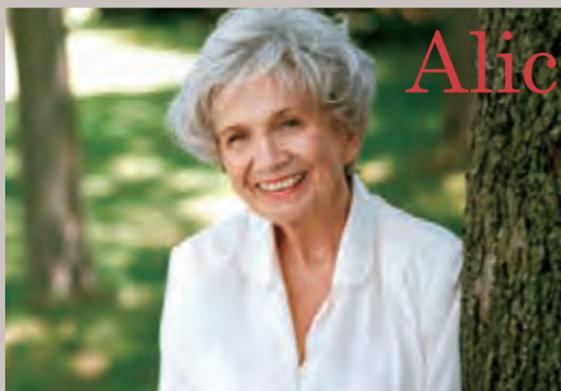
冒険の果てにシェリルは何を手に入れ、何を失うのか。最後のページにたどりついたとき、彼女といっしょに見る景色に誰もが胸ふるわせることだろう。



〇一三年に「短篇の名手」としてカナダ人初のノーベル文学賞を受賞したアリス・マンローは、一九三一年、オンタリオ州の小さな町ウィンガムのはずれの、春先には川が氾濫する低地の農場で、毛皮獣の飼育を生業とする父と元教師の母の第一子として生まれた。上昇志向の強い母は娘を町の学校へ通わせた。貧困家庭の多い低地から町中までの長い通学の道のりは、観察眼が鋭く空想癖のある少女をのちの作家とする一助になったようだ。

やがて母がパーキンソン病を発症、同じ頃父の毛皮獣の事業が潰え、生計のために奮闘する父を助けて、十代のはじめから母の介護や家事、弟妹の世話を担うようになった。そして二年間の奨学金を得て大学へ進学。学内誌に短篇を投稿して注目を浴びながらも学費が続かず学業を断念、同窓で二歳年上のジェームズ・マンローと二十歳で結婚し、夫が職を得たバンクーバーで新婚生活を始めた。

都会の裕福な家庭出身である夫との考え方の違いに悩みながらも、マンローはその後の十五年間で四人の



# Alice Munro

デビュー 50周年記念。  
処女短篇集を  
翻訳刊行!

小竹由美子・文  
text by Kotake Yumiko



2013年、カナダ人初のノーベル文学賞を受賞。授賞理由は「現代短篇小説の名匠であること」。「ブリッジはできません。テニスもしません。ほかの人たちが習い覚えるそういつたことをいいなあとと思うのですが、どうも時間がなくて。窓から外を眺める時間ならあるのですが」(ニューヨーカー誌のインタビューより)

『幸せな霊たちの踊り』(仮)  
は1968年刊行のデビュー作。  
2018年11月、  
小竹由美子訳で刊行予定。

娘(二番目は生後すぐ死亡)を産み育てた。長女シラによると、子供に匙でものを食べさせるように本を与える母親で、シラは十三歳のときに作中の少女が同年齢である『ロリータ』を薦められたという。家事や育児の合間の細切れの時間にマンローは短篇を書き続け、ラジオや雑誌に採用されるようになった。

夫婦はやがてビクトリアにマンロー書店を開業、忙しい毎日に書店の仕事が加わった。四女出産のあと、マンローはそれまで発表した作品から選んだものに新たな三篇を書き加え、一九六八年、初の短篇集『幸せな霊たちの踊り』を刊行、権威ある総督文学賞を受賞し、一躍注目を集めた。だがこの頃から夫婦の亀裂は深まり、離婚。マンローはオンタリオ州へ戻り、大学で同窓だった地図・地理学者のジェラルド・フレムリンと再会して再婚、自身の実家にも近い夫の実家に移った。

久々に戻った故郷をマンローは新たな目で観察して短篇を執筆、ニューヨーカーに掲載されるようになり、国外でも注目されはじめた。自分に

は短篇が向いていると自覚したマンローは短篇のみを書き続け、国内外の賞をつぎつぎと受賞。二〇〇九年には国際ブックカー賞を受賞し、二〇一二年、『ディア・ライフ』が刊行された翌年、八十一歳で引退を宣言、同年ノーベル賞を受賞した。今のところ宣言どおり、その後新たな作品は一切発表されていない。

市井の人々、とりわけオンタリオ州の田舎町に暮らす女性を主人公とした作品が多く、自身の過去もよく題材として使うマンローの作風が窺えるインタビューの一節がある(二〇〇一年、「ニューヨーク」)。「物事―物事の内側の物事―の複雑さはきりがないように思えます。というか、簡単なものなど何もない、単純なものなど何もないのです」

この言葉どおり、マンローは何気ない日々の暮らしに目を凝らし、その奥で人知れず展開する驚くべきドラマを描き出す。心の機微を簡潔な表現で浮き彫りにする一見平易に見える文章には、緻密な企みが凝らされている。物語は往々にして現実と記憶、過去と現在が自在に移り変わ



(新潮クレスト・ブックス)の既刊マンロー作品。右から日本での刊行年順に。全米批評家協会賞最終候補作『イラクサ』、父方のスコットランド系ルーツをたどる自伝的作品『林檎の木の下で』、伝記的作品を含む『小説のように』、「最後の本」である『ディア・ライフ』、全米批評家協会賞『善き女の愛』、ギラー賞受賞作にしてアルモドバル監督が映画化した『ジュリエット』。

りながら進み、一篇に流れる時間の長ささと内容の濃密さに、読後呆然としてしまう。ジュンパ・ラヒリをはじめ、マンローのテクニクを激賞する作家は多い。

デビュー短篇集『幸せな霊たちの踊り』が、刊行後五十年目に当たる今年、新潮クレスト・ブックスから拙訳で刊行される。育児と家事と書店での仕事に忙殺されるなかで編まれたこの短篇集は、驚くほど完成度が高い。意表を突く展開、登場人物や情景をリアルに立ち上げて、出来事の断面だけではなくその背後の奥行まで描く筆力は、初期の頃からのものだった。「ディア・ライフ」の最後の哀切な言葉へと連なる、母の葬儀に出席しなかつた娘の子連れ帰省を描く「ユトレヒト講和条約」、「雇われさん」(『林檎の木の下で』収録)と同じ要素を持つ「日曜の午後」などのこの作品に繋がるモチーフも散見される。

田舎の農場での子供時代に始まり、さまざまな困難を乗り越えながら短篇作家として世に出るまでの、マンローの原風景が広がる一冊だ。

# 海外文学 のない 人生なんて

角田光代×小川高義  
×松家仁之

新潮クレスト・ブックス創刊20年を記念して、名優トム・ハンクスのデビュー作『変わったタイプ』と、ミランダ・ジュライの初の長篇『最初の悪い男』が同時刊行されます。作家の角田光代さんと翻訳家の小川高義さん、クレスト・ブックスの創刊編集長で現在は小説家の松家仁之さんに海外文学のたのしみについてお話をいただきました。

今井麗・絵



**松家** これから「海外文学のない人生なんて」というちょっと挑戦的なテーマでお話するわけですが、私には当てはまる定義なので異存はありません（笑）。角田さん、小川さんは、読者としてどのよう  
に海外文学と出会われたのでしょうか。

**グレイビーツースにつまずいて**

**角田** 私ぐらゐの世代ですと、子どもの頃、ごく普通に絵本や童話で海外のものが身近にあって、どの国の物語ということとはあまり意識しないで楽しんでいました。ただ、中学生ぐらゐになって、ちょっと厚めの海外文学を読むようになると、「グレイビーツース」のような知らない言葉が出てくる。そうすると、いちいちそこで立ち止まってしまう子だったので、中学、高校ぐらゐの頃は、実はあまり海外ものを読まなかった記憶があります。

**松家** グレイビーツースで食わず嫌いになってしまった。

**角田** そうなんです。

**松家** 意外ですけど、なるほどですね。

**小川** 「海外文学がなければ生きていけない」というのは、実は私に一番該当する言葉なんですよね。なんととっても「メ



シの種」ですから、なけりゃ本当に生きていけない(笑)。まあ、それはともかく、なぜ海外文学かというと、大学受験に一回失敗して、でも予備校に行くのもなんとなく嫌で、ずっと家にいたんですよ。まだ町の普通の本屋でも海外のペーパーバックを売っていた時代でしたので、受験英語が嫌になると、ペーパーバックをバラバラ読むことで勉強の代わりになっていたんですよ。そこが出発点。

**松家** そういえば私が「小説新潮」の編集部にいたころ、柴田元幸さんの翻訳でバリー・ユアグロアの連載を担当していたんですね。柴田さんと若手翻訳者の話になったとき、「小川高義さんがいい。うまいです」と太鼓判を押されていたのを覚えています。柴田さんとは大学院が一緒だったそうですね。

**小川** ええ、大学院の同期で、同じ授業に出たり、食堂でメシを一緒したりという仲でした。大学院を出たあと、「翻訳の仕事があるけど手伝わない?」と声をかけられたのがきっかけで、この道に入ったところもありますよね。

**松家** 角田さんがいまのように旺盛に海外文学を読まれるようになったのは、何かきっかけでもあったのでしょうか。

**角田** 高校生から大学生になる頃、八〇年代半ばの話なんですけど、当時は翻訳小説が世に溢れていたんですね。「よし、読むぞ」と思って手に取るんだけど、なんだかゴツゴツして読みづらくて、ますます遠ざかってしまった。九〇年代に入ってから、たまたま手に取ったいくつかの翻訳本がすごく面白くて、小川さんが翻訳された、ポール・ラドニツクの『これいただくわ』とか、青山南さんが翻訳された『世界は何回も消滅する』同時代のアメリカ小説傑作集』が震えるほどおもしろかった。『シャンブー・プラネット』のダグラス・クープランドにもはまりました。九〇年代前半にそうした文章がスーッと頭に入ってくるような翻訳書に続けざまに出会えて、それで無事戻ってこられたんだと思います。

**小川** すごく嬉しいですね。

**角田** 私も今日、初めて小川さんにお目にかかれて、翻訳書の世界に戻りたくてさってありがとうございました、とお礼を言いたい気持ちなんです。

### 翻訳は絵を見て「書くべし

**小川** おそらく私の世代だと、「訳す」と

いう意識があまりないんじゃないかと思うんです。原文を読むことで、まずその現場のイメージみたいなものを受け取る。でもその段階ではまだ言葉ではないんですよ。翻訳に限らず、文章を書くときはみんなそうだと思いますけど、まず言葉ではないものが頭にあって、それを言葉にする。翻訳もそうでなければと思うんです。翻訳を特殊な文章だと思いたくない。頭の中に絵をつくっておいて、その絵を見て書く、という感覚ですかね。

**角田** そうなんですか！ 深いですね。  
**松家** 小川さんのような翻訳のあり方があらわれたことはもちろんですけど、角田さんがおっしゃる九〇年代は、アメリカを中心若い新しいスタイルの作家がつぎつぎ登場した時代でもありましたね。たとえば、自己啓発本の文体を揶揄して使いながら、微妙に揺れる恋愛心理を描いたりするローリー・ムーアとか。

**角田** では、翻訳文の問題というよりも、文学のシーンにおいて代替わりがあって、面白い時代になったのが、九〇年代ということですか？

**松家** 翻訳が出るまでの時差があるので、八〇年代後半から九〇年代に入ったあたりで潮流の変化はあったと思います。

**小川** あるいは、新しい文学の流れに翻訳者が対応し始めたのかもかもしれません。私はそもそも翻訳という仕事は、原作があって、それを一種の台本のようにして、訳者が一人芝居をしているようなものと思っているんですね。それで昔からよく言うのが「訳者は役者」。

**松家** (笑) うまい。

**小川** ダジャレなんですけど、我々にとって、何を翻訳したかということは、俳優がどの監督と、誰の脚本で演じたかという経歴と一緒なんです。何を訳してきたのが、訳者の個性にとっても大きな影響を与えていると思います。

**角田** なるほど。

**小川** ついでに言いますと、役者も訳者も世間に出る場所、つまり「舞台」がないと仕事ができない。その意味で、この〈新潮クレスト・ブックス〉というシリーズがあることがすごく嬉しいんです。いわば「クレスト座」というすごくいい劇場があるので、「こんどの舞台でそこに出るか?」と言われたら、役者ならぬ訳者の私としては、もう嬉しくて、「よろこんで!」という感じですよ。あと二十年ばかり続いてくれたら、私も寿命でしょうから、あとはおまかせしますが(笑)。

松家 いや、八〇代半ばで現役の翻訳者、

横山貞子さんのような方もおられます。

店じまいを考えるのは早いです(笑)。ところで角田さんのグレイビースの呪いはどうやってとけたのでしょうか？

角田 克服したと思うんですよ。「グレイビース」が何であるかわかったところで、急に小説の面白さが深まるわけではない、ということ、身をもって知ったんだと思うんです。わからない単語なり地名なりがあっても、そこに注意を持っていく読み方をしなくなりました。

松家 いまは簡単に検索できますしね。



ジュンパ・ラヒリと私、  
同じ年なんです。だから  
登場したときに  
ものすごく興奮しました。  
なかでも『低地』は  
すっごいところまで行って  
しまったなと思ったんです。

かくたみつよ 1967年神奈川県生まれ。90年「幸福な遊戯」で海燕新人文学賞を受賞。『対岸の彼女』で直木賞、『八日目の蟬』で中央公論文芸賞、『紙の月』で柴田錬三郎賞、『かなたの子』で泉鏡花文学賞、『私のなかの彼女』で河合隼雄物語賞を受賞。著書多数。

### 言語というフロンティア

角田 松家さんは、なぜクレスト・ブックスを作ろうと思われたんですか。

松家 翻訳書を出している出版社ということで新潮社を志望したのですが、実際に翻訳書を担当できたのは入社から十数年後でした。異動してまもなく神田の東京堂書店の二階に行つて、新潮社の翻訳書の棚を見てみたくて。なんだかとりとめがない並びで、編集者の顔が見えないというか。しかも日本では無名に近い作家の本を単体で出しても読者には届かないことが多い。ローリー・ムーアもそ

のひとりでした。

この会場の *Book* (東京・神楽坂) もそうでしょうけれど、今まで知らなかった雑貨やブランドが発見できるかもしれないという期待をもってセレクトショップに行くわけですよ。そのような海外文学の新しいシリーズができないかと考えたんです。でも当時は「新潮・現代世界の文学」という叢書があったので、「それと別に新しいシリーズなんてやる意味ないだろう」と担当部長にディスられた(笑)。私はへそ曲がりなので、それで火が点きました。もう絶対出してやると。

小川 おかげで私たちが出る場ができたので、それはありがたい(笑)。

松家 これまでクレスト・ブックスで刊行された一五〇冊のリストを見直してみたら、移民系作家がじつに多いんです。クレスト・ブックスの特徴のひとつかもしれない。

小川 移民が新しい文学をもたらすことは、アメリカの歴史の中では決して目新しいことでもなくて、昔からやっていることの繰り返しですよ。

松家 なるほど。インド系アメリカ人のジュンパ・ラヒリも、その継承者といえるわけですね。



「訳者は役者」。

我々にとって、  
何を翻訳したかということは、  
俳優がどの監督と、  
誰の脚本で演じてきたかという  
経歴と一緒になんですよ。

おがわたかよし 1956年神奈川県生まれ。東京工業大学名誉教授。翻訳家。ジュンペ・ラヒリ『停電の夜に』『その名にちなんで』『見知らぬ場所』『低地』、ジョン・アーヴィング『また会う日まで』、クセニヤ・メルニク『五月の雪』など訳書多数。著書に『翻訳の秘密』。

**小川** ラヒリにとって、言語は一種のフロンティアなんですよ。アメリカ人が西へ西へと移動してフロンティアを開拓していく、というようなことを言葉でしている人。今はちょっと遠くへ行きすぎで、イタリア語まで行ってしまったのが残念ですが(笑)。

**松家** クレスト・ブックスから『べつの言葉で』という本が出ていますよね。ラヒリがイタリア語で書いたエッセイと短篇が収められたもので、翻訳者はイタリア語の中嶋浩郎さんですね。でも、風の噂によると、またアメリカに帰ってきているらしい。

**角田** ジュンペ・ラヒリと私、同い年なんです。だから登場してきたときに、ものすごく興奮しました。面白いし、もっと読みたい、もっと読みたいと思ううち、どんどん新しいことに挑戦していつ、イタリアまで行ってしまったのが私もすごいショックで。その前に長い小説を書いたじゃないですか。兄弟の……。

**松家** 『低地』ですね。

**角田** そう！『低地』がもう素晴らしくて、「すっごいところまで行ってしまったな」と思っただけです。そしたらイタリアに行ってしまった。『べつの言葉で』には、ラヒリがイタリア語を学んでゆく過程も

描かれていて、人間が新しい言語を獲得し、そこで小説を書こうとしたときに、まったく違うものが出来上がっていくところを生々しく見せてくれている。イタリア語を書けるようになってはじめて書いた小説を読んでみると、そこに私の思う「ラヒリっぽさ」はないんですよ。すごく観念的で、言葉を組み立てているように思えてしまう。言葉の外に出ていかない。そのことに驚いたし、そういう「人が言葉をツールとする瞬間」を見せてくれるのも、すごいと思いました。でも私が読みたいのは、やはり『低地』の先の小説なんです。このままイタリア語で書き続けるのでしょうか。

**小川** そこが問題ですよ。

**角田** ……というのがすごく心配だったので、アメリカに帰ってきているという情報にわくわくしました。

**小川** 『低地』を訳しながら途中ですごく興奮していたんですけど、なんだか彼女の総決算的な感じがして、「ひょっとして、これで終わりになっちゃったりしないかな」という不安がきざすほどでした。ところが終わりになるどころか、別の国まで突き進んでしまったわけですが(笑)。

**松家** 誰にも質問されないまま勝手に答

えてしまいますが、クレストの約一五〇冊の中で一冊選べといたら、私はジュンパ・ラヒリの『低地』ですね。

**小川** ありがとうございます。

**松家** 打ちのめされる傑作でした。

**角田** 本当にすごいですよね。

**小川** 私も翻訳中、普通の状態とは違っていて、「これは凄い、なんて素晴らしいんだ」と感動しながら訳していました。

**松家** ラヒリはまた、英語で長篇を書くにちがいないと思っています。

### トム・ハンクスって作家がいるの？

**松家** さて次は、還暦を過ぎた新人の話題です。映画俳優のトム・ハンクスが書いた短篇小説集『変わったタイプ』が八月に出るんですね。一足先にゲラで読みましたが、今年の上半期に読んだ小説のなかでもダントツに面白かった。いやあ本当に驚きました。「トム・ハンクス」という名前が邪魔なくらい。別のペンネームにしたほうが正當に評価されるのではと。

**小川** (笑)

**松家** そう思えるくらいに多彩な短篇小説集でした。さきほど控室で、角田さん

も激しく同意してくださって。

**角田** トム・ハンクスって、もちろん私も名前は知っているんですけど、ちょっと私は鈍いので、違うトム・ハンクスだろうと思ったんですよ。それで読み続けたのですが、女優の卵が出てくる「配役は誰だ」という、とても短い話があるんですね。女優さんになりたくてニューヨークに出てくるんだけど、いろんなことがうまくいかない。その話が異様にキラキラしてるんですよ。作品の出来とかなきゃなくて、なんかビックリするぐらい異様な光を放っているんです。

それから、タイムマシンで過去に戻る「過去は大事なもの」という荒唐無稽な話があるんですけど、映像がくっきり浮かぶんです。「え？ 何、この感触。トム・ハンクスっていったい何者なの？」と違ってこない。「え？ もしかして……」とそこで初めて気が付いた(笑)。自分のよく知る業界のことを書いたものがこんなに光を放つとは、というのが大変面白い読書体験だったんです。

**小川** ありがとうございます。それを聞いて安心しました。さきほどラヒリの『低地』を感激しながら訳したと言いました

けど、ほとんどそれに匹敵するぐらい面白がって仕事をしていたんです。やっぱり画作りがとびぬけて上手いですね。明日もこの仕事があるぞと思うと、寝る前にウキウキするぐらい(笑)。

**松家** 慌てて彼のことを調べたら、ヴィンテージもののタイプライターのコレクションなんですね。二〇〇台以上持っているらしい。タイトルにも、小説の仕掛けにも使われているのがまた憎らしくて。

**小川** ええ、そうなんです。さきほど角田さんが、ラヒリと同一年だとおっしゃっていましたが、実は私はトム・ハンクスと同一年なんです(笑)。昔タイプライターを打った記憶がおぼろげにまだある。ああ、タイプングはこうだったかな、こうしてレバーを動かして、みたいなことを必死になって思い出しつつ翻訳作業を楽しんでいました。

**松家** あの短篇小説の面白さの源泉がどこにあるのか、なかなか言い尽くせないところがあるのですが、たしかに角田さんがおっしゃるのように、映画の世界で長年やってきた蓄積もあると思うし、やっぱりいちばん感じるのは、相当な小説読み、小説好き、ということですね。

**小川** そのようですね。

**松家** しかもアメリカの短篇小説の伝統

を感じさせる。「ニューヨーカー」や「エスクァイア」のような老舗雑誌がアメリカの短篇小説の隆盛を支えてきたわけですが、そのような短篇小説の山脈をひたすら縦走してきた結果、彼のからだにも何か沁みこんできたんじゃないか。

**小川** そんな感じがします。だから、彼の小説は決して特殊ではなくて、むしろアメリカの小説家としてはメインストリートに在るのかもしれない。私の感触でいうと、O・ヘンリーにとってもよく似てますね。人間に対する見方とか、ちょっととユーモラスにひねってみるところとか、非常にまともなんです。健全な読後感が残る。皮肉に書いていても、やっぱり人間が好きなんです。ひょっとすると現実のアメリカよりも、願わくば「こうあってほしいアメリカ」かもしれないけど、そういう人間のタイプをいろいろ見せてくれる短篇集だと思います。

**松家** 敵しい家庭環境も描かれるし、救いのないような悲しい話も出てきます。それでも読み終えてみれば、人生を肯定したい気持ちになってくる不思議。

**小川** そう、肯定的ですね。

**松家** マーク・トウェインの血統のよう

なものも感じました。

**小川** あ、それもあります。書評でそう書いている人もいましたね。

**松家** トランプ大統領のアメリカの表層をひと皮剥けば、まだそこには「善きアメリカ人として善きことをしたい」という、偽善ではないシンブルな気質が生きている気がします。トム・ハンクスの書く人物にはそんな匂いが漂う。

**小川** そういうキャラクターそのままの読後感じゃないかな。いい人であることに對して照れがないというか。

**松家** 嫌味がないんです。トム・ハンクスもいい人なんだろうというのが小説からひしひしと伝わってきますね。

**小川** 私もそう思いました。それに映画俳優であれだけいろんな役を演じて、言ってみれば、いろんな人生を生きているわけですね。経験から書いたことだけでもバリエーション豊かになれる人だと思います。「あ、この短篇の下敷きにあの映画があるんじゃないかな」と、気がつく楽しみもあると思います。

### 短篇小説の魅力を再発見する場

**松家** そして、この八月末にクレスト・

ブックスの創刊二〇周年記念として同時に刊行されるのがミランダ・ジュライの最新作『最初の悪い男』です。角田さんもお好きでいらっしやいますよね。

**角田** 好きです。クレスト・ブックスがあるから出会えてよかったという作家の一人なので、新刊が出ると聞いてものすごく楽しみです。

**松家** クレスト・ブックスには「こういう作品でなければ」という規範、規定はあるようで、ない。小説ばかりでなくノンフィクションも入ってますから。ミランダ・ジュライの前作『あなたを選んでくれるもの』は異色のインタビュアー・ノンフィクションでしたし、彼女自身、映画監督、女優でもある。そして今回の三作目は初めての長篇小説です。トム・ハンクスもミランダ・ジュライも小説の世界にとって異邦人ととらえる人もいるでしょう。私はそうは考えないんです。小説という表現ジャンルは誰が入ってきてもビクともしないものなんです。つまり、かなりリベラル、かなり寛容なジャンルで、誰が何をしてもへこたれない頑丈さがある。日本でも又吉直樹さんが小説を書いて評価されました。「こんなよ者がどうして小説なんて書くんだ」なん



小説という表現ジャンルは  
誰が入ってきても  
ビクともしないものなんですよ。  
かなりリベラル、  
かなり寛容なジャンルで、  
誰が何をしてもへこたれない  
頑丈さがある。

まついえまさし 1958年東京都生まれ。編集者を経て、2012年、長篇小説『火山のふもとで』を發表、読売文学賞を受賞。『光の犬』で芸術選奨文部科学大臣賞、河合準雄物語賞受賞。小説作品に『沈むフランシス』『優雅なかどうか、わからない』。

て考えは小説というジャンルにはふさわしくない。移民はウェルカムなんです。  
**角田** そうですすよね。日本語は誰でも使えるから、文章は書けるじゃないですか。サッカーは誰もが試合に出られるものではないと思うけれども、文章を書くのは誰でもできますから。  
**松家** インド人を両親にもつジュンパ・ラヒリが、英語の本を浴びるように読んで、やがて小説を書いて評価される。カズオ・イシグロもかしら。  
**小川** そうですね。文学自体も移民でできてきたような、移民国家の移民文学みたいなところあると思いますが、それは

確かに寛容です。本屋に並んでしまえばみんな同じみたいなところでしょね。

**松家** 今日は語る時間がなくなっちゃいましたけど、クレスト・ブックスは短編集が多いんです。一五〇冊のうちの四〇冊くらいが短編集です。新潮社で翻訳書の担当になった頃、「短編集は売れないんだよ」とよく言われました。でもスタートして間もなく、エリザベス・ギルパートの短編集『巡礼者たち』を出したら、これが版を重ねた。ジュンパ・ラヒリの『停電の夜に』も短編集でしたよね。短編集の魅力をもう一度問い直すことのできた二〇年でもあったと、あらた

めて気づきました。

**小川** 訳者としては、これは人それぞれでしょうけど、私は短編集のほうが翻訳していて楽です。ちょっと一息つけるところがある。その代わり、書き出しの部分には一番気を遣います。「今度の作品はどういうタッチなの?」とか、「どういう角度からどういうふうにもものを見るの?」という、文章のありようを決めるまでにちょっと手間がかかります。長篇は、真ん中あたりで、苦しくなることがけっこうあるので(笑)、短篇のほうが少しは息がつける感じがします。だから短篇の仕事をくださいと言っているわけではないのですが、あったらまたください(笑)。

**松家** ぜひまた新しい才能を、小川さんの翻訳で読ませてください。

**角田** 出会えてよかったと心から思う作家が、個人的にいちばん多いのがクレストというシリーズですね。私は未だに知らない作家の海外文学を手取るときは慎重なんですけど、クレストならばはずれないという信頼を、この二〇年で得ることができました。今後、どんなあたらしい作家に会えるか、とてもたのしみになっています。 **C**

# Le Chapeau de Mitterrand

by Antoine Laurain



## アントワース・ロラン 『ミッテランの帽子』

吉田洋之

text by Yoshida Hiroyuki

九八〇年代という時代は文化的にも政治的にも重要である。現在のパリやフランス、そしてEUを理解する上で欠かせない時代。ミッテラン大統領の通称グラン・プロジェクトと呼ばれるパリ大改造計画は賛否両論を引き起こしたが、当時建てられたモニュメントは今のパリを代表するものばかりである。ルーヴル美術館のガラスのピラミッド、オルセー美術館、ラ・デファンスの新凱旋門などもこの時代のものである。また政治・経済面においても、西ドイツのコール首相と連帯し、EUの成立を推進させ、後の

ヨーロッパ統一通貨の導入へと繋がっていく。この作品には随所にそうした時代の熱いうねりを感じられる。ミッテランがブラッスリーに置き忘れた帽子は人から人へと渡っていく。うだつの上がらない会計士のダニエル・メルシエ、望まない不倫関係を続けている作家志望のファニー・マルカン、輝きを失ったかつての天才調香師ビエール・アスラン、高級住宅街に暮らす名家の保守資産家ベルナル・ラヴァリエール……それぞれ運命は帽子を手にしてから奇妙な仕方で変わっていく。読者は八〇年代のフランスにどっぷり浸

りながら、様々な人間ドラマに触れていくのだ。携帯もインターネットも無かった時代。人は手紙を書き、ミニテル（情報端末機）を利用して

いた。この小説の魅力には右のような時代のいきいきした描写があるが、ここではプロットの巧みさも挙げておきたい。一見、それぞれ独立した短篇小説のようでありながら〈帽子〉が横糸となって物語を繋いでいき、読者はそのユーモアに富んだ、スリリングな展開に吸い込まれていく。「もはや抵抗は不可能」「独特で愉快な、サブライズ入りチョココレートのような味わい」……絶賛の書評が続いた。二〇一二年に出版された当作品はランデルノー賞、及びルレ・デ・ヴォワイヤジュール賞を受賞し、国を超えて十数カ国語に翻訳され、今なお〈帽子〉は旅を続けている。最後のページを閉じた後、エシヤロット・ベネガーをかけた生牡蠣を無性に食べたくなるのは、きっと私だけではないはずだ。C

（今冬刊行予定、タイトルは仮題）



ただいま  
翻訳中! ①

photographs by  
Tsubota Mitsuteru

新潮

# クレスト・ブックスの ベスト20 ranking

photographs by  
Tsubota Mitsuteru

1998年5月、『キス』『旅の終わりの音楽』の2作品からスタートした  
新潮クレスト・ブックスは、今年7月までに147作品を刊行してまいりました。  
創刊20周年を記念して、2018年の「ベスト20」を発表いたします!



第1位

ベルンハルト・シュリンク

『朗読者』

松永美穂訳・2000年刊

新潮文庫版と合わせると80万部を超える  
ベストセラー。ほかシュリンク作品は『逃げて  
ゆく愛』『帰郷者』『週末』『夏の嘘』が刊行  
されている。最新刊は『階段を下りる女』。

### 第3位

ミランダ・ジュライ

## 『いちばんここに似合う人』

岸本佐知子訳・2010年刊

女優で映画監督のジュライは本書でフランク・オコナー国際短篇賞を受賞。インタビュー集『あなたを選んでくれるもの』を経て、初めての長篇小説『最初の悪い男』が刊行に。



### 第2位

ジュンパ・ラハリ

## 『停電の夜に』

小川高義訳・2000年刊

このデビュー短篇集でペリツァー賞を受賞したラハリは、『その名にちなんで』『見知らぬ場所』『低地』と作品を重ね、近年はイタリア語で書いた『べつての言葉で』を発表。

### 第4位

アンドレイ・クルコフ

## 『ペンギンの憂鬱』

沼野恭子訳・2004年刊

憂鬱症のペンギンと暮らす売れない小説家ヴィクトルの周りでつぎつぎと起こる怪事件。キュートな装画と不条理な可笑さで愛される、新しいロシア文学のロングセラ。



### 第6位

T・E・カーハート

## 『パリ左岸のピアノ工房』

村松潔訳・2001年刊

パリに住むアメリカ人の著者は、ふと訪れた小さな工房で職人リュックと知り合う。名器の再生物語を通じて、ピアノを愛する人々を描いた上質なノンフィクション。



### 第5位

アリス・マンロー

## 『イラクサ』

小竹由美子訳・2006年刊

今年でデビュー50周年。2013年にノーベル文学賞を受賞したマンローはクレストで6作品を刊行、デビュー作も刊行予定(P.20-21参照)。とりわけ人気の短篇集がこれ。

この20年間に刊行された新潮クレスト・ブックスのなかから特別印象に残る作品を選んでくださいと言われたら、みなさんはどの本が思い浮かぶでしょう。

20周年を機に、17名の作家・批評家のかたがたに「わたしの3冊」を選んでいただいたところ（47／54頁、全147作品のうち37もの作品が挙げられました）。

無数の異なるベストがあることを前提に、シリーズ創刊20周年にちなんで「ベスト20」を編集部で選んでみました。各作品の総発行部数をベースに、おりおりのアンケート結果、刊行時の新聞・雑誌等での書評掲載数などを加味し、総合的に判断しました。残念ながら品切れの作品は除き、一作家一冊に限定しています。

これからの20年もぜひ読み継がれてほしい20作品が揃いました。

\*各作品の内容紹介は巻末の「全点カタログ」をごらんください。



## 第9位

### リュミラ・ウリツカヤ 『ゾーネチカ』

沼野恭子訳・2002年刊

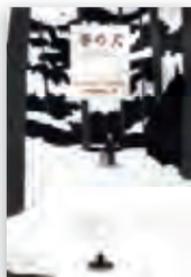
ひたむきで無垢な女性の一生を描いた愛の物語。このほかのウリツカヤ作品に、『通訳ダニエル・シュタイン(上・下)』『女が嘘をつくとき』『子供時代』『陽気なお葬式』。

## 第7位

### マーカス・デュ・ソートイ 『素数の音楽』

富永星訳・2005年刊

謎に満ちた存在、素数。その美に挑む天才たちを描いた数学者ソートイの名著。ほかに『シンメトリーの地図帳』『数字の国のミステリー』、最新刊『知の果てへの旅』。



## 第8位

### アリスティア・マクラウド 『冬の犬』

中野恵津子訳・2004年刊

カナダ東端の島を舞台に、過酷な自然とともに生きる人々を描くマクラウド。わずか16篇ながら傑作揃いの全短篇小説を、本書と『灰色の輝ける贈り物』の2冊に収める。



## 第10位

### アンソニー・ドーア 『すべての見えない光』

藤井光訳・2016年刊

デビュー短篇集『シェル・コレクター』で脚光を浴び、『メモリー・ウォール』で短篇小説の名手との評が定まったドーアが、第二次大戦下のフランスを舞台にした感動の長篇。2015年、ピュリツァー賞受賞。



順位	作品名	著者	訳者	刊行年
11	千年の祈り	イーユン・リー	篠森ゆりこ	2007
12	終わりの感覚	ジュリアン・バーンズ	土屋政雄	2012
13	オスカー・ワオの短く凄まじい人生	ジュノ・ディアス	都甲幸治・久保尚美	2011
14	ウォーターランド	グレアム・スウィフト	真野泰	2002
15	未成年	イアン・マキューアン	村松潔	2015
16	屋根裏の仏さま	ジュリー・オオツカ	岩本正恵・小竹由美子	2016
17	タイガーズ・ワイフ	テア・オブレヒト	藤井光	2012
18	遁走状態	ブライアン・エヴンソン	柴田元幸	2014
19	あの素晴らしき七年	エトガル・ケレット	秋元孝文	2016
20	四人の交差点	トンミ・キンズネン	古市真由美	2016



# Ali Smith

## 遊び心たっぷりの 二つのバージョン

### アリ・スミス 『両方になる』

木原善彦訳 2018年9月刊行予定

木原善彦・文  
text by Kihara Yoshihiko

Coming  
Soon

photograph ©Antonio Olmos

「あ  
のね。わたし、木に恋して  
しまった。どうしようもな  
かったの。花がいっぱいに  
咲いている」

岸本佐知子編訳『恋愛小説集』  
の劈頭を飾るアリ・スミスの短篇  
「五月」はこんなふうになる。ど  
こかずれているような、それでいて  
新鮮で、魅惑的な書き出しだ。彼  
女の作品にはいつも、心浮き立つ  
不思議な読み心地があって、いつ  
の間にか周囲の風景が普段と違っ  
て見えてくる気がする。

二〇一六年、イギリスが国民投  
票でEU離脱を決めた直後にスミ  
スが刊行した『秋』（未訳）の中  
では、登場人物がこんなことを口  
にする。「政府の嘘にはうんざり。も  
はや嘘をつかれても何とも思わな  
い国民にもうんざり。その恐ろし  
さを日々つきつづけられることにもう  
んざり。憎悪にも。臆病にも」。こ  
ちらは、スミスが時代の空気をいか  
に敏感にとらえ、それを表現する  
のにどんな修辭を用いるかを典型  
的に示す一節だ。

この秋、ついに邦訳が刊行され  
ることになった話題作『両方にな

る』にも、スミスのそんな魅力があ

ふれている。この小説は前半と後半の計二部から成る。一方は二十一世紀のイギリスに暮らす十六歳の少女ジョージ（本名はジョージア）、他方は十五世紀のイタリアに実在した画家フランチェスコ・デル・コッサが主人公だ。ジョージはつい最近、母を亡くしたばかりで落ち込んでいた。母が亡くなる前に、何者かに行動を監視されているみたいに感じていたことも、まだに気が引越すことになったのもさみしい。フランチェスコは女として生まれながら、胸に布を巻くなどして男を装って成長し、画家になる。男同士のつもりで仲良くなっていった親友は、彼女の真実を知ったとき……。

難解な作品ではないし、テンポよく物語は展開するので、読者は印象的な挿話を次々に読み進め、あつという間に第一部、つまり前半を読み終えるだろう。ところが、そこのいきなり、面食らうところが、と。というの、そこからまた第一部が始まるからだ。それは第二部

の誤植ではない。

著者からの要望があつて、訳書本体（あとがきや帯文を含め）には詳しく書けないのだが、本書には前代未聞の仕掛けがある。幸い、書評や広告媒体で仕掛けに触れることは禁じられていないので、それをここに記しておこう。実はこの本には、英語版の原著でも他の言語に翻訳されたものも、すべて二つのバージョンが同じ数だけ存在する。半数の読者は、イギリスの少女ジョージを主人公とする物語が前半、画家フランチェスコを主人公とする物語が後半というバージョンを手にし、残り半数の読者は、画家フランチェスコの話が前半、ジョージの物語が後半という形で印刷された本を読むのだ。奇書として有名なミロラド・パヴィイチ『ハザール事典』には男性版と女性版が存在して、表紙もISBNも（中身も少しだけ）違うが、『両方になる』の二つのバージョンは表紙やISBNに違いはないので、この本にそんな仕掛けがあると前もって知らぬ読者はただ偶然任せでいずれかのバージョンと出会う。

「何のためにそんな仕掛けを？」というの重要な問いだが、それに答えるのはいずれかを一冊通読した後になる。

そもそも二つの物語は無関係ではない。ジョージは母が元氣だった頃に、父を除く家族でイタリアに旅行し、フランチェスコがスキファノイア宮殿の壁に描いた絵を見ていた。そしてフランチェスコの現は二十一世紀によみがえり、異国イギリスに暮らすジョージの日々を、言葉も生活習慣もよく分らないままに見守っている。この二つの物語の絡み合い、響き合いを、どうか読者の皆様には、二分の一の確

率で私と同じバージョン、あるいは異なるバージョンで味わっていたきたい。

かく言う私は、フランチェスコが前半のバージョンを最初に読んだ。それは驚くような読書体験だったが、少しだけ残念なのは、ジョージのパートが先に置かれた『両方になる』をゼロから味わいたかと思っても、もはやそれが不可能ということだ。本も、人と同様に、出会い方を私たちの側が選ぶことはできない。それをこれほど痛感したのはずいぶん久しぶりの気がする。

Ali Smith  
How to Be Both (2014)



# 四

〇〇〇メートル級の名峰が連なる北イタリアのモンテ・ローザ。都会の少年ピエトロは、毎年夏になると、両親とともにその山麓で休暇を過ごしていた。山登りをこよなく愛する気難しい父と、周囲の人々との関係を育む才能に恵まれた母、そして内向的で繊細な一人っ子のピエトロ。ナタリア・ギンズブルグを彷彿させる家族の描写から物語は始まる。

マーク・トウェインの小説を読んで川に強い憧れを抱いていたピエトロにとって、山の家の前を流れる沢は、まるごと一本の川に匹敵するほど豊かな発見の場だった。そこで、おなじ年頃の村の少年ブルーノと友達になる。互いに持っているものが異なるからこそ、陽イオンと陰イオンのように引きつけ合う二人は、沢登りや廃屋探検、森の散策をしながら、かけがえない時間を共有し、ピエトロの父に連れられて氷河の残る頂にも挑む。知と冒険の宝庫である山には、人生哲学が凝縮されて

いた。

やがて成長し、父に対する反発心から両親と行動を共にしなくなったピエトロは、ブルーノとも山とも疎遠になり、都会で孤独な日々を送っていた。進むべき道も定まらないままに歳月が過ぎ、三十代になったとき、ブルーノとの再会を果たす。

そして少年時代をともに過ごした山の奥で、父の遺したものと向き合うことになる。山は、過去の記憶や言葉にできなかった心の傷、秘められた父の足跡を大切に保管し、二人を待っていた。父の遺志が完遂されたとき、新たな登場人物を迎えて、物語は未来へと大きく踏み出す……。

「僕は、この小説を子供の頃からずっと書き続けてきたのかもしれない」と語る著者のパオロ・コニエッティは、いまイタリアで最も注目されている若手作家の一人だ。デビュー以来、おもに短篇を書いてきた彼が、二〇一六年、満を持して発表した初の長篇小説である本書は、ブルーノの段階から

Coming  
Soon

photograph ©Roberta Roberto

# Paolo Cognetti

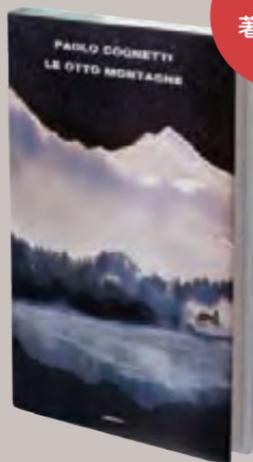
街の少年と山の少年  
二人の人生が  
ふたたび山で交錯する

パオロ・コニエッティ  
『八つの山』

関口英子訳 2018年10月刊行予定

関口英子・文  
text by Sekiguchi Eiko

Le Otto Montagne,  
Paolo Cognetti (2016)



2018年  
11月  
著者来日  
予定!



三十か国に版權が売れ、話題をさらっただけでなく、イタリア文学界の最高峰《ストレーガ賞》と、同賞ヤング部門とのダブル受賞という快挙を成し遂げた。また、フランスの《メディシス賞》外国小説部門を受賞するなど、国外でも高く評価されている。現在、本国イタリアでは、舞台化や映画化が進められている。

本書のとりわけ前半は自伝的要素が強いと作家自身が語るとおり、コニエッティもミラノ生まれの都会っ子で、夏を両親と山で過ごしていたという。十年ほど前から、一年の大半を山小屋にこもり、執筆に没頭する。堆肥のにおい、草いきれ、森を吹き抜ける風、凍りついた湖面の感触……静寂のなかに漂う気配を掘り起こすような精緻な語り口は、読者を雄大なアルプスの自然のなかに連れ込み、物語世界に浸らせる力を持っている。

「男どうしの友情は、なかなか得がたいものだ。僕と同年代の男たちは、恋人や妻、家族といった生

活の基盤を持つ者もそうでない者も、それぞれに孤独を抱えている。身体を使った作業を共にすることによって、人は、心地よい沈黙からなる、真の信頼関係を築くことができるが、都会では、そのように濃密な時間を分かち合うことは難しい」

タイトルは、中央に最も高い須弥山がそびえ、そのまわりを八つの山がとり囲んでいるという古代インドの宇宙観からとられている。中央の頂をひたすら極める者と、周囲の山をめぐる者。ひとつにはそれぞれの宿命がある。都会に吸い寄せられ、居場所を求めてさまよう者も、生まれ落ちた場所にしがみつくようにして暮らす者もみな、孤独との向き合い方を探しあぐねているのかもしれない。

山に対する郷愁だけでなく、未来へとつながる物語を書きたかったという著者が用意した息を呑むラストまで、ページをめくる手がもどかしい。

◎



## ソナーリ・ デラニヤガラ 『波』

佐藤澄子  
text by Sato Sumiko

〇〇四年のクリスマスの翌日、ロンドン在住のソナーリ・デラニヤガラは、家族でスリランカ南岸のヤーラ国立公園に滞在中、スマトラ島沖地震で発生した津波に遭い、夫とふたりの小さな息子と、両親を失った。助かったのは彼女一人だった。

この手記は、ソナーリが自分のために書き始めたものだ。自分に何が起きたのかを理解するために。

ソナーリ・デラニヤガラはスリランカのコロンボ生まれ。ケンブリッジ大学、オックスフォード大学で経

済学を学び、同窓の夫と結婚した。その明晰な頭脳が、驚くべき正確さで自分の体験を記していく。記憶を辿りながらこぼれ出る愛とユーモアが、この手記を、深い深い怒りと悲しみの記録にもかかわらず、きらきらさせている。

この本に描かれている動物や鳥木々や花々、そしてソナーリが津波に遭った場所を見てみたいと思ひ、その島を訪ねてみた。ヤーラ国立公園のサファリでは、ゾウの親子に遭遇した。スパイスの香るカレーを食べながら、ソナーリの家のキッチン

に流れていた香りを思い浮かべた。スリランカの人たちは穏やかで優しくかった。暑ければ紅茶を飲んで休む。一家が滞在していたホテルの跡地はそのまま放置されていた。壁が流され、土台だけが残ったホテルには木が茂り、床のタイルの隙間から雑草が伸びて、少しずつ自然に帰っていくようだった。そこから見た濃い青色の海は、どこまでも平らだった。

ソナーリはこの手記を津波から八年後に書き上げている。彼女にはそれだけの時間が必要だった。二〇一一年を記したところでは、東日本大震災の津波がソナーリとも交錯する。日本を変えたあの日から、もうすぐ八年。悲しみとの共生には時間が必要だということ、記憶は遠ざかるものではなく育つもののだということ、何を教えてくれるこの本が、日本で特別な読者を見つけるかもしれないと思っている。

二〇一三年全米批評家協会賞ファイナリスト。同年ニューヨークタイムズ紙「今年の十冊」に選出。

(二〇一九年刊行予定、タイトルは仮題)

ただいま  
翻訳中!②

photographs by  
Tsubota Mitsuru





# 心の中で思うこと

These Are the Meditations of My Heart

(短篇小説集『変わったタイプ』より)

トム・ハンクス

小川高義・訳

translation by Ogawa Takayoshi

古いタイプライターなんて買うつもりではなかった。もう何も欲しくなかった。持ち物を増やす気がなかった。新品でも、中古でも、骨董でも、何一つ要らなかつた。いやなことがあったばかりで、この落ち込んだ日々を、スバルタ式に厳しく生きて乗り切ろうと誓ったのだ。一種のミニマリズム。車一台におさまるくらいの生活でよい。

彼女は小さなアパートが気に入っていた。カヤホガ川の西に位置している。彼との暮らしで着ていた衣服は、すべて処分してしまった。バカな男だった。いまの彼女は、ほとんど毎晩、一人で自炊して食事を済ませ、ポッドキャストを聴きまくっている。それなりに貯金はあるので、ぼんやりと気楽な夏を過ごすしても、年が明けるまではどうにかなる。一月にはエリー湖が凍って、建物の水道管が破裂するかもしれないが、それまでにはどこかへ行っているだろう。

う。ニューヨーク、アトランタ、オースティン、ニューヨーク……。身軽な旅なら、いくらでも候補地はある。

ところが、ミシガン通りとシカモア通りの角にあるヘレイクウッド・メソジスト教会<sup>①</sup>で、土曜日の駐車場セーラーをやっていた。地域の奉仕活動にあてる資金を稼ごうというわけで、たとえば無料のデイケアとか、アルコール依存を脱する互助会とか、よく知らないが弱者に食事を宅配するとか、そんな目的があったようだ。彼女は教会へ行く人間ではないし、メソジストの洗礼を受けたこともないけれど、ぶらっと立ち寄るくらいはよいだろうと思つた。駐車場にカードテーブルがずらりと並んで、どれもヤードセール<sup>②</sup>の売れ残りみたいな品物を満載している。これを見て歩くのは、信仰の行為ではない。

つい面白がつて、冷凍ディナーのアルミ皿セットを買いそうになったが、よく見ると三枚に錆が出かかっていた。おしゃれ用のジュエリーにも、お宝の箱はなさそうだ。するとへタッパ<sup>③</sup>ウェア<sup>④</sup>のアイスキャンディメーカーが目に入った。子供の頃は、粉末ジュース<sup>⑤</sup>、あるいはオレンジジュースを、型に流し込む作業をまかされた。プラスチックの柄を差して、あとは冷凍庫に入れる、というだけの物理学で、安上がりなアイスクャンディを楽しめた。溶けかかるフルーツ味の氷で手をべたつかせな

がら、丘陵地帯の夏の風に吹かれていた。あの感触がよみがえるような気がして——値切ることもなく、このセットに一ドルを出していた。

同じテーブルに、タイプライターも載っていた。ポットアート調の赤い色がくすんでしまつて、見た目にはよくない。だが見下ろして気になったのは、左の隅にくっついている粘着ラベルの文字だった。小文字ばかりの列に（ソフトと6のキーで）下線を引く、というように元の持ち主が打つたのだ。

### こころの なかで おもうこと

もう三十年くらい前にタイプされたのだろう。まだ新品だった機械が、箱から出されたばかりで、どこかの女の子が十三歳になった誕生日プレゼント、ということだったのかもしれない。そして、もっと新しい別の持ち主が、「五ドルで買ってください」と印字した紙を、キャリッジに巻き込んでいた。

ポータブル型で、筐体はプラスチック製である。リポンは二段に分かれて、上半分が黒、下が赤。カバーの部分に穴があいているのは、（スミス・コロナ）〈ブラザー〉〈オリヴェッティ〉のような商標がついていた痕跡だ。赤みがかつた合成皮革のキャリングケースもあった。機械をすべり込ますように入れてから、プッシュボタ

ン式の留め金で閉めるようになっていた。ためしに三つのキーをたたいてみた。A、F、P……。どれもパタッと紙を打って、しっかり戻った。まだ使える、らしい。

「これって、ほんとに五ドルなんですか？」彼女は手近なテーブルにいた店番らしいメソジストの婦人に言った。

「それ？ 動くとは思いますが、いまだき使う人なんていないかもね」

ということを知りたかったのではないが、そこは不問にした。「これ買います」

「買うんなら五ドルよ」

こうしてメソジスト派があっさり活動資金を増やした。

アパートに帰って、パイナップルジュースを凍らせる準備をした。夜に涼しくなつてから窓を開けて、蜜が出てくるのを見ながら、アイスクャンディを二つ三つ食べるつもりだ。それからタイプライターを安っぽいケースから出して、小さなキッチンテーブルに載せると、ヘレライターに給紙していたプリンター用の紙を一枚抜いて、くるくると装着した。ひととおりキーをたたいたが、あちこちで引つ掛かる。底面に四つあるはずのゴ

ム脚が一つなくなっているの、全体にがたついている。上段からキーを順番に一つずつ強打して、大文字でも同じようにしてみた。引つ掛かっていたキーがいくらか動くようになった。リボンは古いものだったが、打った字はどうか読める。キャリッジリターンの行間は、シングルにもダブルにもできるようだ。ただし、ベルは鳴らない。マージン調整のスライダーは、がりがり進んでから、突っかかるように止まった。

よほどに錆落として潤滑の処理をしないと、使い物にはならないようだ。たぶん二十五ドルくらいかかるかもしれない。だが、もつと困ることがあった。二十一世紀にタイプライターを買う人間の悩みと言つてよからう。どういう使い道があるのか――。

封筒に宛名を書ける。母に手紙をタイプして、ふらふら生きている娘からの便りで喜ばす。元彼には嫌がらせのメッセージを出せる。「バカな男が、もつたいないことをしたわよね！」なんて書いてやっても、eメールみたいな記録は残らない。何かしらタイプして写メしてから、ブログやフェイスブックに上げてもいい。自分用の予定メモを書いて冷蔵庫のドアに貼ることもできる。ということ、もう五つは使い道ができた。新規に古物を所有すること、ヒップでレトロな根拠である。もし心の奥の瞑想でも書くとしたら、しっかりした使い道の六

番目ということになる。

彼女は元の持ち主が意図したように打ってみた。

### こころのなかでおもうこと

スペースバーがまともに動かない、というのは厳しい。彼女はスマホをつかんで、「中古 タイプライター 修理」と検索した。

その結果、三件の候補が挙がった。一軒目はアシユタビューラの町に近くて、行くとしたら二時間はかかる。その次がダウンタウンの店で、これは電話しても出なかった。ところが、どうかしてるんじゃないかと思わくらいで、歩いて数分の距離に〈デトロイト通りビジネスマシンの〉という店があった。これなら知っている。タイヤの店の隣だ。その先には大きなピザ屋があって、もうちょっと先に閉店間際の画材屋があるので、いまままでに何度も店の前を通過した。

小さい店である。てっきりコンピューターの店がプリンターの修理もやっているのかと思っていたが、歩いて行ってウィンドーをのぞいてみたら、意外におもしろい店だとわかった。昔の加算機がある。三十年前の留守番電話で、ディクタフォンとかいう機械もある。古めかしいタイプライターもある。ドアの上のベルをちりと鳴

らして、店に入った。

店内の半分は、ただのプリンター屋だった。箱に入った製品のほかに、トナーカートリッジを各種取り揃えている。ところが、もう半分は、「往年の事務機ミュージアム」と言ってよかった。キーが八十一個と引き手のハンドルがついた加算機、テンキー式の単純な電卓、速記用タイプライター、IBMセレクトリック・タイプライター（多くはベージュ色の筐体）などがあった。また壁に作り付けた棚を見ると、何十台ものタイプライターが分類されていて、黒、赤、緑、薄い青の光沢を放っている。いずれも現役ばりばりで使えそうに見えた。

サービスカウンターは店の奥だった。カウンターの向こうに机や作業台があって、書類を見ている老人がいた。「どんな御用ですか、お嬢さん」いくらか訛りがあった。ポーランド系という見当か。

「じつは直してほしいものがあって」彼女は合成皮革のケースをカウンターに置いた。留め金はずし、タイプライターを取り出す。それを見た老人から溜息が洩れた。「ええ、そうなんです」彼女は言った。「だいたい傷んでるみたいで、キーは半数くらい動かなくて、打つたびにがたついて、スペースバーがいかれちゃってます。ベルも鳴りません」

「鳴らない——。あー」

「どうか助けてもらえませんか。これに五ドルつき込んでしまったんで」

老人は彼女を見てから、機械に目を戻した。また溜息を洩らす。「お嬢さん、どうにもなりませんよ」

これは困った。彼女の目で見ると、タイプライターの修復をするとしたら、この店のほかにないような気がする。老人の背後の作業台には、分解した機械や、タイプライターの部品やがあるではないか。「ああいう部品じゃあ、だめってことですか？」

「こいつに合うのがなくてね」老人は、くすんだ赤のタイプライターと合成皮革のケースの上で、手のひらを揺らした。

「取り寄せられませんか？ 待つのはかまいませんけど」  
「いや、そういうことではなく——」カウンターの端に寄せて、営業用の名刺を入れた小箱があった。老人は一枚とって彼女に持たせた。「ここに書いてありますでしょう？」

彼女は名刺の文字を読んだ。「デトロイト通りビジネススマシン——プリンター販売、保守点検、日曜休業……。ということは、あしたが休みなんですわね。営業時間は午前九時から午後四時。土曜日は十時から三時……。いま私の時計も、お店の時計も、十二時十九分を指しています」

裏面も見たが、そっちには何も書かれていなかった。「どこがいけないんです？」

「この店の名前ですよ」老人は言った。「読んでみてください」

「デトロイト通りビジネススマシン」

「はい。ビジネススマシンです」

「そう、ですよね」

「いいですか、お嬢さん。マシンの店なんです。でも、これは——」ふたたび老人は五ドルのタイプライターに手をひらひら振ってみせて、「おもちゃですな」と、穢らわしいものを見たように言い捨てた。

「プラスチックで、タイプライターに見せかけて製造してますが、これはタイプライターではありません」

老人は「おもちゃ」だと言うものの上部カバーに手をかけた。その力でたわんだプラスチックが、ぱんと跳ねるようにはずれると、内部の機構が見えていた。「タイパー、レバー、リボンスプール——これもプラスチックだ。リボンリバー、バイブレーター」

そんなものが手動式のタイプライターに入っていると、彼女はまったく知らなかった。

老人はキーをいくつか引っぱたき、レバーを弾いて、キャリッジを左右に動かし、プラテンを回して、バックスペースキーを打った。まったく気に入らないらしい。

「タイプライターというものは、正しく使えば、世界を変えられることができる。そういう道具です。しかし、これは？　ただ場所をふさいで、うるさい音を立てるだけじゃない」

「ちょっと油を差すくらい、できませんか？　それで私も世界を変えられるんなら、やってみたいですよ」

「掃除して、油を差して、あちこち締め直すことなら、できなくもない。ベルも鳴らせる。六十ドルは請求するとして、ちょいちょいと魔法をかけたことにしましょう。でも、それじゃあ素人の弱みにつけこんだ、ぼったくり商売になる。あと二年もしたら、またスペースバーが――」

「いかれちゃう？」

「悪いことは言わないから、持って帰って、花でも挿して飾るときなさい」老人は、死んだ魚を新聞紙に包むように、タイプライターをケースに戻した。

彼女は気まずい思いをしていた。努力もせず、出来の悪い作文を提出して、先生の期待を裏切った子供のような気分だ。もし元彼と別れていなくて、あのバカ男がこの場にいたとしたら、きっと老人の味方をして「だから言ったじゃないか」と言うだろう。「こんなガラクタを買うからいけない。五ドル？　もったいない！」

「ご覧なさい」老人は大きく腕を振って、壁の棚にいらんだタイプライターを見せた。「こういうのがマシンで

すよ。みんなスチール製でね。技術屋の作品なんです。アメリカ、ドイツ、スイスの工場で、そのように作られた。どうして棚に置いているかわかりですか？」

「売り物だから？」

「ずっと生き続ける製品だから！」もはや老人の声は叫びというに近かった。その中に、彼女は父が叱りつける声を聞いたように思った。「芝生に自転車置きっぱなしにしたのは誰だ？　……教会へ行くつてのに、どうして俺だけしか着替えてないんだ？　……一家の父親が帰ったんだから、誰かしら抱きついてきたらどうなんだ！」

彼女は、いま自分が老人に笑顔を向けている、と思っ  
た。● (抄録／短篇小説集『変わったタイプ』より)

## 心の中で思うこと

このあと老人は、彼女にさまざまなタイプライターを実演して見せる。ささやくように繊細な機械音の(レミントン7)、ポータブル型の(サファリ)、スイス製の高級機(ヘルメス 2000)。次第に興味を掻き立てられてきた彼女に老人が言う。「ひとつだけ条件をつけてよければ、お売りしますよ。つまり、これを使ってくださいばよい」

一人の部屋にマシンを持ち帰った彼女は、それをキッチンテーブルに据え、まずは買物メモを打ち出した。夜風にあたってアイスを食べ、こんどは心の中で思うことを、静かにタイプしはじめた。

# Der Trick

by Emanuel Bergmann



エマヌエル・ベルクマン

『トリック』

浅井晶子

text by Asai Shoko

## ナ

チス政権下のベルリンで栄華を極めながら、二十一世紀のロサンゼルスではすでに忘れ去られた奇術師ザバティニー。ついに自殺を図ったある日、ひとりの少年がやってきて、離婚の危機にある両親を「愛の魔法」で仲直りさせてほしいと頼み込む。だがスケベで偏屈な老人となり果てたザバティニーは、少年の必死の頼みを、魔法などないと一蹴する。すべての魔法はトリックに過ぎないのか――。

ンは米国在住のドイツ人で、当初この物語を英語で書いた。ところがその原稿がスイスの名門ディオゲネス社の目に留まり、ベルクマンは変更や修正を加えてすべてをドイツ語で書き直した。こうして『トリック』は、二〇一六年にディオゲネス社からドイツ語で出版された。翌年には英語版も刊行されたが、オリジナルはドイツ語版であり、諸言語への翻訳もドイツ語版が底本となる。無名の新人の作品を大々的に売り出すという賭けに出たのは、ディオゲネス社の社長だという。賭けは見事にあり、本書は出版直後から絶賛を浴

びて、ベルクマンを一躍ベストセラー作家の地位に押し上げた。すでに十五か国語に翻訳されている。全編が「魔法」というモティーフに貫かれ、どこかおとぎ話のような雰囲気をもった物語は、二十世紀のヨーロッパの場面はメランコリック、二十一世紀のアメリカの場面はユーモラスで軽妙、と異なる筆致で交互に語られ、一方での謎がもう一方で明らかになるといった調子で徐々に近づき、最後に融合する。奇術が奇跡となるクライマックスには、上質のミステリの謎解きにも似た痺れるようなカタルシスがある（それゆえ、ミステリ同様、ここで具体的なことを書けないのがつらいところだ）。

ドイツ語では「奇術」も「魔法」もともZauber(ツァオバー)。しかし本書のタイトルはZauberではなく『トリック』。人の目を欺く手段に過ぎないトリックが真の魔法に変わる瞬間を、堪能していただきたい。

（二〇一九年刊行予定、タイトルは仮題）

ただいま  
翻訳中!◎

photographs by  
Tsubota Mitsuteru



# Soinujolearen Semea

by Bernardo Atxaga



## ベルナルド・アチャガ 『アコーディオン弾きの息子』

金子奈美  
text by Kaneko Nami

一九九九年、アメリカ合衆国カリフォルニア州、ストーンハム牧場。物語は、バスク地方からの移住者ダビの死とともに幕を開ける。ストーンハムを訪れた幼馴染みのヨシエバは、未亡人のメアリー・アンから、ダビが亡くなる前にバスク語で書き残したという回想録「アコーディオン弾きの息子」を手渡される。ダビはなぜ異国の地で、家族にすら読めない言語で自分の人生の記憶を書き残さなければならなかったのだろうか？そこで彼が語り、向き合おうとした過去とは何だ

ったのか？  
作家であるヨシエバは、故郷の町オババに帰ったあと、親友ダビの回想録に、自分自身の記憶を補いながら加筆・編集し、二人の共著として出版することを決意する。そのようにして成立したとされる本書『アコーディオン弾きの息子』には、一人の故郷喪失者の物語と同時に、スペイン内戦後に生まれ、フランコ独裁からテロの時代へと暴力の歴史を生きてきた、バスク地方のかつての若者たちの一世代の記憶が含まれている。

ベルナルド・アチャガは、スペイン北部とフランス南西部に跨るバスク地方で話される、バスク語という少数言語の書き手だ。架空の土地オババをめぐる連作短篇集『オババコアック』（一九八八年、邦訳二〇〇四年）で一躍国際的な注目を集めた彼の作品は、欧米の主要言語のほか、ウェールズ語、トルコ語、韓国語、アムハラ語など、三十以上の言語に翻訳されてきた。二〇〇三年に発表された本作は、そうして世界的な書き手の一人となったアチャガが、それまでの作家人生のすべてを一冊の本に収めるべく、世紀の変わり目に約七年かけて書き上げた長篇小説で、スペイン批評家賞、グリーンザーネ・カヴール賞（イタリア）、モンデッロ賞（イタリア）、タイムズ・リテラリー・サプリメント翻訳賞（イギリス）など数々の賞に輝いたほか、バスクでは映画化が進行中。その重要な作品にさらに日本語で新たな命を吹き込むべく、鋭意翻訳中です。

◎一九九年春刊行予定、タイトルは仮題



ただいま  
翻訳中！④

photographs by  
Tsubota Mitsuru

book guide

Painting by Imai Ulala

[アンケート]

新潮クレスト・ブックス

# わたしの 3冊

世界中のオリジナルな文学を  
発信する新潮クレスト・ブックス。  
創刊以来20年のあいだに  
刊行されたおよそ150冊の  
なかから、お気に入りの  
三作を挙げていただきました。  
感動の大作から驚愕の  
異色作まで、さまざまな  
魅力の詰まったセレクションです。  
今井麗・絵

\*印の作品は現在品切です。

## 青山七恵

『花粉の部屋』

ゾエ・イエニー「平野郷子訳」\*

『ソーネチカ』

リュドミラ・ウリツカヤ「沼野恭子訳」

『四人の交差点』

トシミ・キンヌネン「古市真由美訳」

■十五年ほどまえ、はじめてひとりぐらしをした町の図書館で『花粉の部屋』をみつけた。カバー折り返しの写真からじっとこちらをみすえる著者は、白いシャツを着て、すごく寒いところにいるひとのように、胸のまえで腕をぎゅっとかかえていた。読みはじめてすぐにかかった。これはきつと、一生本棚に置いておきたい、だいたいな本になるんだと。別れた母親を訪ねて遠い町にやってきた主人公のヨーは、幽霊のようにひそやかに、にぎやかによそよそしい町を彷徨する。歩いても歩いてどこにも辿りつかない。家はもはや帰る場所ではない。最後に彼女がみつけたのは、雪がふりはじめた夜明けの、小さなベンチだった。「雪が

落ちてきて溶けるまでの、目にもとまらない一瞬をわたしは待っている」。ヨーはまだ、同じベンチで雪を待っている。ひさびさにページを開いてみれば、わたしもまた、ずっとその隣に座っていたことに気づく。

## 朝吹真理子

『記憶に残っていること』

アリス・マンロー、他「堀江敏幸編」

『遁走状態』

ブライアン・エヴンソン「柴田元幸訳」

『屋根裏の仏さま』ジュリー・オオツカ「若本正恵・小竹由美子訳」

■小説を読んでいる時間がいつまでも過去になってゆかない本、三冊。短篇アンソロジー集の『記憶に残っていること』は、クレスト・ブックスを読みはじめたところに手に取った。なにを読んだらいいか迷っていた私にとって、大切な地図になった。十篇が並んでいる本のたたずまいは、子供のころ鉱物標本を取り出して、石をくちのなかにそっとふくん

だときの喜びに似ていた。

ブライアン・エヴンソンは、いくら読んでも腑におちない。腑におちないから余計惹かれる。みえない箱の存在に気づいて不眠になった女性（「見えない箱」）のことを知り合いの身に起こったように、時折思い出す。

二十世紀初頭に写真花嫁としてアメリカに渡った女性達の生活が語られる『屋根裏の仏さま』は、主語が「わたし」ではないからこそ響く声の物語だった。かつて生きていた「わたしたち」が働くすがたが、かなしくて、ときどき美しく、何度も音読している。

## 池澤夏樹

『冬の犬』アリスティア・マクラウド

「中野恵津子訳」

『停電の夜に』ジユンパ・ラヒリ

「小川高義訳」

『知の果てへの旅』

マーカス・デユ・ソートイ「富永星訳」

■このシリーズとは縁が深い。初め

手に取ったのは『旅の終わりの音楽』だったと思う。手に取ったは文字通りのことで、軽いことに驚いた。それまでの日本の本にはない手触りで、それだけで洋書のような感じ。

初めて書評を書いたのは『スコットランドの黒い王様』。ウガンダの大統領イディ・アミン・ダダが主人公で、ぼくは彼が統治している時にウガンダのすぐ近くまで行って、彼の悪評の故に入国しなかったのだから親近感があった。

ちょっと自慢は『灰色の輝ける贈り物』と『冬の犬』。ぼくが見つけたのだ。二〇〇〇年にカナダに旅行して帰る時、バンクーバーの空港で機内で読むための本を買った。知らない作家の短篇集だったが、これがおもしろくて夢中で読んだ。紹介して翻訳されたのがこの二冊。長篇『彼方なる歌に耳を澄ませよ』も出た。まったく同じ経緯でアメリカカのインド系の若い女性の作家を見つけ、これもいいよと言ったら、ちょうどクレスト・ブックスで翻訳が出るころだった、というのが『停電の夜』。出遅れたのだ。

今は『知の果てへの旅』を読んでいる。こういう理系のものも含むのがこのシリーズのよいところで、思えば最初期の『ケンブリッジ・クインテット』も楽しかった。

## いしいしんじ

『ウオーターランド』

グレアム・スウィフト「真野泰訳」

『すべての見えない光』

アンソニー・ドーア「藤井光訳」

『その名にちなんで』

ジュンパ・ラヒリ「小川高義訳」

■すばらしい小説を読み終わると、ひとにその一冊を託したくなる。新潮社にとっては迷惑な読者だ。でも、ある一冊が、ひとの手から手へ旅していく、という情景は、クレスト・ブックスによく似合っている。『ウオーターランド』の一エピソードとして出てきてもおかしくないくらい。『歴史』と『物語』の共鳴。土地と川のせめぎあい。人間同士のたてる切実なノイズ。豊穣なこの一冊がまだ手もとにあるのは、三回買い直し、

とある書店イベントで書店員さんからプレゼントしてもらったから。『すべての見えない光』も四冊持っていた。これほどひとに勧めた本はない、くらいに勧めまくった末、いまは最後の一冊がある。『その名にちなんで』は、たしか五回買ったけれど、五冊とも手もとにはない。考えてみれば、なんだ、新潮社にしたら表彰状もの読者じゃないか。

## 井上荒野

『小説のように』

アリス・マンロー「小竹由美子訳」

『タイガーズ・ワイフ』

テア・オブレヒト「藤井光訳」

『甘美なる作戦』

イアン・マキユアーン「村松潔訳」

■『小説のように』マンローの短篇を読むたびに、いったいどうしたらこんなふうな物語を思いつくことができるのだろうと羨望する。砂の中からガラスの欠片を掬い出し、磨き上げ、まったく別の物質に変えてしまいうような手捌き。『イラクサ』『デ

『イア・ライフ』など著者のほかの短編集も全部すばらしい。『タイガーズ・ワイフ』万華鏡のように繰り返し出される物語、過剰さが美しさにもなっている。戦争による破壊や暴力を背景にして、その最中であって（だからこそ）息づいている物語のかけがえのなさ。一九八五年生まれという若い著者の、物語への誠意と情熱にうたれる。『甘美なる作戦』マキユーアンの企みに酔いながら、小説とは何か、を考えさせられる。恋愛小説としても出色だと思う。

## 江國香織

『ウォーターランド』

グレアム・スウィフト「真野泰訳」

『いちばんこに似合う人』

ミランダ・ジュライ「岸本佐知子訳」

『べつ言葉で』

ジョン・ラヒリ「中嶋浩郎訳」

■物語に心を攫われる、という、人生の喜びのなかでも一二を争う満ち足りた体験をさせてくれる小説がクレストには多いのですが、『ウォータ

ーランド』もその一冊。じっくりと読めて、おもしろく、ひたっているうちに、気がつけば遠い場所に運ばれている、そんな小説です（アリスティア・マクラウドやウィリアム・トレヴァー、イアン・マキユーアンやチャンネ・リーもそうなので、チャンネ・リーの復刊希望。『いちばんこに似合う人』は、新鮮で生気に満ちた、著者の才能がまぶしい一冊。ミランダ・ジュライは小説の可能性をひろげたと思う。『べつ言葉で』は、ひたすら美しい本でした。言葉と人格と書くことについて、静かに、勇敢に綴られていて、私にとっては、夜空でまたたく星のような、勇気づけられる存在の本です。

## 小川洋子

『巡礼者たち』

エリザベス・ギルバート

〔岩本正恵訳〕\*

『冬の犬』アリスティア・マクラウド

〔中野恵津子訳〕

『奇跡も語る者がいなければ』

ジョン・マグレガー「真野泰訳」

■この三冊についてならば、心に刻まれた大切な場面をすぐによみがえらせることができる。一節を暗唱することもできる。ストーリーを思い出せないとしても、たとえタイトルを忘れたとしても、宝石のようなそのきらめきだけは決して消えない。

……スポーツマン結び、控えめな結び目——いつまでもほどけないけれど、緊急のときや用のすんだときは、端を引っ張るだけですぐにほどける結び目。

……「誰でもみんな、去ってゆくものなんだ」と父が静かに言う。私は父がサンタクロースのことを話しているのだと知っている。「でも、嘆くことはない。よいことを残してゆくんだからな」

……どうしてそれを奇跡と呼ぶことができるだろう、と彼は言う。

## 小山田浩子

『遁走状態』

ブライアン・エヴンソン「柴田元幸訳」

『夜、僕らは輪になって歩く』

ダニエル・アラルコン「藤井光訳」

## 『オーブン・シティ』

テジユ・コール「小磯洋光訳」

■『遁走状態』を読んでいると、たとえば一作目の短篇「年下」、その題名に始まり、子供の遊びのてきばきしていて不気味な描写、言い間違いが生む魔法、取り返しがつかなくなってしまう今……を読んでいると、再読で薄々内容を覚えていても毎回私は新たにぎょっとし、そしてなぜか読む手を止めて書きたくなくて書き出してしまふ。続きを書きたいとか書かれていたことからアイデアが浮かぶというのとは違う。おそらく、読む面白さがかつて書いたときの面白さに勝手にアクセスしてしまうのだ。そこには、先がわからないまま指を動かして文章を書いているときと同じ恐れと興奮がある。難しいことだけど、そうやって書いた小説が首尾よく完成しかつエヴァンソンのと同じくらい面白い、ということになれば、きつと言うことはないだろう。

## 加藤典洋

『千年の祈り』 イーユン・リー

〔篠森ゆりこ訳〕

『善き女の愛』 アリス・マンロー

〔小竹由美子訳〕

『低地』 ジュンパ・ラヒリ「小川高義訳」

■イーユン・リーの『千年の祈り』をなぜ読んだのだったかはおぼえていない。けれども、米国在住の若い中国人の書く古くから続く大陸中国の生活風景の描写が新鮮だった。繊細なニューヨークの路上の霜柱の針先がおだやかなモンソーンの空気のなかで少しとまどっている。アリス・マンローの『善き女の愛』は人生の辛酸を描いている。いつの間にか私も十分に年を取ったのだが、このくらいの小説でない、物足りない。辛酸にも、ほかの酸と同様に、pH度の濃いものも薄いものもある。そのグラデーションが作者を立ちどまらせている。ジュンパ・ラヒリ『低地』は信頼する友人に、その年に読んだ小説のベストといわれて読もうと思ったが果たしていない。そのと

きの言葉がトゲのように心に刺さったまま。いま手がけている仕事が終わったら読んでみるつもりだ。

## 古谷田奈月

『マザリング・サンデー』

グレアム・スウィフト「真野泰訳」

『千年の祈り』 イーユン・リー

〔篠森ゆりこ訳〕

『あの素晴らしき七年』

エトガル・ケレット「秋元孝文訳」

■『マザリング・サンデー』で描かれるのは格差社会だが、現在のフェミニズムに対する著者の応答として私は読み、より感動が深まった。弱さが強さとして、強さが弱さとして機能し、自由が勝利をかっさらっていく。切実ながら爽快な中篇。

『千年の祈り』のぶ厚い筆力には圧倒された。短篇で、これほどの密度とこれほどのスケールを描き出せる同時代の作家がいることを本当に喜ばしく思う。とことんハードな想像力。

愛おしくてたまらないのは『あの

素晴らしき七年。』どうしても許せないことは何か、笑って語れないことは何か。自分の中のシリ阿斯面を完全に自覚している人だけが生める、骨太なユーモアで笑わせてくれる。ユーモアはヒューマニティ、私たちの最後の希望。この本の素晴らしさは、人間という生き物の素晴らしさとイコールだ。

## 滝口悠生

『もう一度』

トム・マッカーシー「榎木玲子訳」

『オープン・シテイ』

テジユ・コール「小磯洋光訳」

『ガルヴェエイアスの犬』ジョゼ・ルイス・ペイシヨット「木下真穂訳」

■いずれもとほとほ歩くように思索を進めるような語りが好きなの三作。散策。

『もう一度』では、ある男の失われた記憶の細部が『オープン・シテイ』では、マンハッタンの街に埋もれた歴史が、『ガルヴェエイアスの犬』ではポルトガルの小さな村の人々の人

生が。一步一步、ためらいがちに歩を進めるように、語られる。

読み手もまた、語り手の歩みに速度を合わせる必要がある。私が好きなのは、これらの作品の語り手たちの歩みの弱さだ。彼らは雄弁に語るよりも、むしろ、そこにいる人々や街から、あるいは自分の記憶から、どんな声が聞こえるのか、耳をすましているように思う。自らの手で小説を紡ぐのではなく、聞こえる声が小説の形をなすのを見守るような語り手たち。読み手である私も、彼らと一緒に耳をすますように、それを読む。

## 津村記久子

『彼方なる歌に耳を澄ませよ』アリスティア・マクラウド「中野恵津子訳」

『四人の交差点』

トシミ・キンヌネン「古市真由美訳」

『記憶に残っていること』

アリス・マンロー、他「堀江敏幸編」

■クレスト・ブックスの登場人物でいちばん好きなのは『彼方なる歌に

耳を澄ませよ』の主人公の母親の父親であるところの、孤独で毅然とした「おじいさん」かもしれない。きちんとした仕事をするまじめなおじいさんが、早くに母を亡くした娘に女性としての生活を教えてやれないから力を貸してくれ、と主人公の父親の母親である「おばあちゃん」を訪ねてくる場面を思い出すと今も胸が塞ぐ。『四人の交差点』のフィンランドの一家の年代記は、報われない愛と齟齬に満ちていても悲しい。しかし読後には、不思議な安堵感がこみ上げてくる。人間はこのように不器用なものでそれでいいという優しい肯定があるからだ。他にも好きな本はたくさんあるのだが、それを代表して『記憶に残っていること』を挙げる。現在の世界の普通人々の姿はどれも興味深い。

## 都甲幸治

『いちばんここに似合う人』

ミランダ・ジュライ「岸本佐知子訳」

『オープン・シテイ』

テジユ・コール「小磯洋光訳」

## 『文学会議』

セサル・アイラ「柳原孝敦訳」

■ クレスト・ブックスでいちばん好きなのは『いちばんここに似合う人』だ。上を向きすぎて首が痛くなるのが嫌だから、人は同じくらい身の身長の人とつき合う、でも恋愛は別、といった屁理屈も魅力的だし、床で泳ぐ真似をしていたら、そこが溶けてプールになるという展開も楽しい。『オーブン・シテイ』はスタイリッシュユカフエスニックであるという点で、真に新たな文学の始まりという気がする。ナイジェリアとドイツの血を引き、マジョリテイでもマイノリティでもない主人公がマンハッタンを散歩しながら、この時代における芸術や政治について深く語っていく。『文学会議』はとにかく笑える。カルロス・フエンテスのクローンを作って世界征服だ！でもまさかの巨大蚕が大量発生して、なんて挿話は実にイカれている。こんなに軽い中南米文学があったのかと驚いた。

## 豊崎由美

『地獄のコウモリ軍団』

バリー・ハナ「森田義信訳」\*

『奇跡も語る者がいなければ』

ジョン・マクレガー「真野泰訳」

『文学会議』

セサル・アイラ「柳原孝敦訳」

■ 選べねーしっ！二十年分の刊行リストをもう一時間もにらみ続けていて、ほとんど涙目なのであります。百五十冊のうち、たった三作しか挙げちゃいけないなんて、無茶ぶりもいいところでしょ。約束したから渋々選ぶけど、だから、これで決定と思うなよ。他にも同じくらい面白かったり素晴らしかったりする作品がいっぱいあるんだかな。

びっくりグルーブ代表はバリー・ハナの短篇集『地獄のコウモリ軍団』。中味読まなくてもこのタイトルだけで傑作。在庫がない状況を新潮社には何とかしていただきたい。感動グルーブ代表は作者と読者しか知ることのない奇跡を描いて静かに胸を打つ、ジョン・マクレガーの『奇

跡も語る者がいなければ。お笑いグルーブ代表は「カルロス・フエンテスに謝れ! (笑)」とツッコミを入れたくなる、セサル・アイラの『文学会議』。あとね……あー、誰かわたしのクレスト愛を止めてっ！

## 西加奈子

『ホワイト・ティース』

ゼイディー・スミス「小竹由美子訳」\*

『低地』ジュンパ・ラヒリ「小川高義訳」

『ポート』ナム・リー「小川高義訳」\*

■ 『ホワイト・ティース』はパングラデシユからイギリスにやってきた三家族の、『低地』はインドからアメリカにやってきた夫婦の、『ポート』はベトナムからオーストラリアにやってきた家族の物語、つまり主人公は「移民」だ。自己の喪失に苦しみ、ささやかな幸せに笑い、運命に翻弄される……、こんな風に「まとめる」ことがもどかしい。もちろん彼らは一人一人違う。作者は彼らの精神の襞に、これ以上ないほど繊細な手つきで触れ、「移民」と

いう「」の中に収まりきらない人生を、移民のバックボーンを持つ彼らでしか描けなかった真摯さで描いている。でも、決して「分かってたまるか」という筆致ではない。だって私にも「分かった」。彼らの経験をも一つもしていない私が、彼らの苦しみが、幸福が、諦めが「分かった」のだ。それは物語でしかなし得ないことだと思う。いつ読んでもその「分かった」に震える三冊だ。

## 東山彰良

『オスカー・ワオの短く凄まじい人生』ジュノ・ディアス

〔都甲幸治・久保尚美訳〕

『世界の果てのビートルズ』

ミカエル・ニエミ〔岩本正恵訳〕

『冬の犬』アリスティア・マクラウド

〔中野恵津子訳〕

■クレスト・ブックスの膨大な既刊作品のなかから「わたしの三冊」を選ぶのは、はっきり言って至難の業だ。だから「少年」という切り口で選んでみた。『オスカー・ワオ』

は南米マジックリアリズムの今日的発露ともいべき作品で、ラテンアメリカ文化に対する私の固定概念を根底から揺さぶってくれた。『世界の果て』は少年期の幻想と死をひんやりとしたユーモアに包んで見せてくれる。『冬の犬』は幻想の入り込む余地がないほどにくっきりとした生命の小説だけど、やはりどことなく幻想的なのはどうしたわけだろう。思うに、人は現実と幻想から成る。その文学的塩梅が見て取れる三冊だと思う。

## 星野智幸

『ハイウェイとゴミ溜め』

ジュノ・ディアス〔江口研一訳〕

『ロスト・シティ・レディオ』

ダニエル・アラルコン〔藤井光訳〕

『屋根裏の仏さま』

ジュリー・オオツカ

〔岩本正恵・小竹由美子訳〕

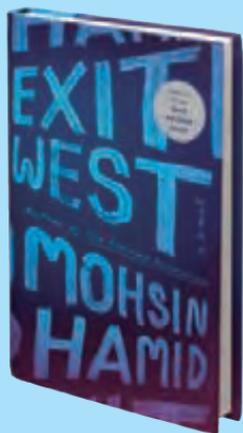
■私は一九九七年の秋にデビューしたので、クレスト・ブックスと同じ時代を歩んできた。作家になって初

めて書いた書評が、ジュノ・ディアスの『ハイウェイとゴミ溜め』だった。今思えば、運命的な出会いである。名も知らない若いドミニカ系アメリカ作家の小説は、自らのルーツとアメリカで生きる自分との関係を必死に言葉にしようとしたものだった。それは移民の世紀の文学が始まったことを告げていた。以降、クレスト・ブックスは、新しい移民たちの書く文学（特にアメリカの文学）の紹介を、一つの柱としていく。ジュンバ・ラヒリ、イーユン・リ、ダニエル・アラルコン、ジュリー・オオツカ等々。ルーツと言語が一つに限定されない者たちの書く文学は、大きな一つの潮流を作りながら、それぞれが新しい個々の文学を発明し続けている。

◎

# Exit West

by Mohsin Hamid



## モーシン・ハミッド 『西への出口』

藤井光  
text by Fujii Hikaru

## 世

世界各地から生み出される、難民についての物語。一方で、グローバル文化が生む寓話と幻想の物語。この両者は水と油のように思われるが、それを斬新に融合してみせた作家が現れた。一九七一年にパキスタンに生まれたモーシン・ハミッドである。

二〇〇〇年にデビュー小説を刊行して以来、ハミッドは小説を二冊刊行し、着実に作家としての評価を高めてきた。テロや経済などを描いて時代に鋭く切り込みながらも、同時に実験的な語りによって、ハミッドは作品ごとに話題性と作家性をうま

く両立させてきた。

そして二〇一七年、本作『西への出口』が、ハミッドの評価をさらなる高みに押し上げることになる。

イスラム圏のある都市で、サイードとナディアという若い男女が出会う。ふたりのぎこちない恋愛模様は、彼らが暮らす街をじわじわと侵食する紛争によって大きく色合いを変えていく。難民となって故郷を離れ、ギリシャへ、そしてロンドンに逃れるふたりは、果たして恋を成就できるのか。

難民問題という現実を背景としながらも、ハミッドは小説に独特の寓

話をすべり込ませてみせる。サイードとナディアの旅路は、「ドア」を抜ければ次の土地に移動しているという形で大胆に省略される。そして、ふたりの物語の周囲に、シドニーや東京など世界各地で「ドア」を出入りする難民たちと移民たちの姿がスナップショットのように配置される。

街に迫る武装勢力との紛争や、移動先での住民との緊張関係、サイードの心が不安定になっていく様子など、物語にはつねに不穏さがつきまとう。しかし、それを語る文体は透明感を失うことなく、セツトが組み立てられては取り外されて次の舞台が用意されるように、現実と幻想のブレンドを味わうことができる。大規模な人口移動と無国籍な寓話をめぐる今世紀の感性が生んだ、軽やかさと重々しさ。そのふたつの配合を完璧に成し遂げ、ハミッドは移民文学に新たな語りの可能性を導入したのだ。

（二〇一九年刊行予定、タイトルは仮題）

ただいま  
翻訳中!  
photographs by  
Tsubota Mitsuteru





### パリ左岸の ピアノ工房

T・E・  
カーハート  
村松潔訳

パリの小さな工房で、若き職人が魔法のように再生する名器の数々……。眠っていた音楽とピアノへの愛が甦る傑作ノンフィクション。

2000円 590027-4



### 停電の夜に

ジュンパ・  
ラヒリ  
小川高義訳

ろうそくの灯りの下、秘密の話を一。ピュリツァー賞ほか独占！インド系女性作家による驚異のデビュー短篇集。もはや古典的名作。

1900円 590019-9



### 朗読者

ペルンハルト・  
シュリンク  
松永美穂訳

十五歳の少年ミハエルが経験した切ない初恋。母親のような年の女性ハンナを失踪させた秘密とは――。衝撃の世界的ベストセラー。

1800円 590018-2



### ウォーター ランド

グレアム・  
スウィフト  
真野泰訳

土を踏みしめていたはずの足元に、ひたひたと寄せる水の記憶――。ブッカー賞作家によるもっとも危険なもっとも愛すべき最高傑作。

2600円 590029-8

## 新潮クレスト・ブックス

# 全点 カタログ

創刊以来20年間に  
お届けしてきた149作の  
小説やノンフィクション作品。  
現在品切のタイトルを含む  
全作品をご紹介します。

(価格は本体価格です)

## Catalog 1998-2018



### 灰色の 輝ける 贈り物

アリスティア・  
マクラウド  
中野恵津子訳

カナダ、ケープ・ブレトン島の苛酷な自然の中で、漁師、坑夫を業とし、一族としての思いを胸に生きる人々。奇跡のような名短篇集。

1900円 590032-8



### 冬の犬

アリスティア・  
マクラウド  
中野恵津子訳

カナダ東端の島で、犬、馬、驚ら動物とともに、祖先の声に耳を澄ませながら人生の時を刻む人々。生の厳しさと美しさを湛えた八篇。

1900円 590037-3



### シェル・ コレクター

アンソニー・  
ドーア  
岩本正恵訳

孤島で貝を拾い、静かに暮らす盲目の老貝類学者を襲った奇妙な騒動を描く表題作ほか、O・ヘンリー賞受賞作を含む鮮やかな全八篇。

1800円 590035-9



### ソーネチカ

リュドミラ・  
ウリツカヤ  
沼野泰子訳

木の虫で、容貌のぼつとしないソーネチカ。最愛の夫の秘密を知ったとき彼女は……。神の恩寵に包まれた女性の静謐な一生の物語。

1600円 590033-5

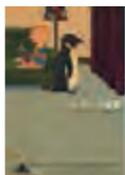


### 奇跡も語る者がいなければ

ジョン・マグレガー  
真野泰訳

奇跡は起こった。密やかに。誰にも知られないまま。斬新な文体と恐るべき完成度で無名の人々の生と死を結晶させた現代の聖物語。

2200円 590043-4



### ペンギンの憂鬱

アンドレイ・クルコフ  
沼野恭子訳

憂鬱症のペンギンと暮らす小説家ヴィクトル。新聞の死亡記事を書く仕事をきっかけに、身辺に不可解な出来事が次々に起こって……。

2000円 590041-0



### その名にちなんで

ジュンペー・ラヒリ  
小川高義訳

長く口にせずにきた思い。愛しい人を遠く焦がれる切なさ。名手ラヒリが精緻に描く人生の機微。ふかふかと胸にしみる待望の初長篇。

2200円 590040-3



### ある秘密

フィリップ・グラッパール  
野崎歓訳

孤独な少年の夢想が残酷な過去を振り起こす。禁断の恋。懊悩。そしてホロコースト。一九五〇年代のバリを舞台にした自伝的長篇。

1600円 590051-9



### 素数の音楽

マーカス・デュ・ソートイ  
富永星訳

神秘的な謎に満ちた数、素数。その不思議な美と今も続く天才たちの挑戦とは。小川洋子さん絶賛のスリリングなノンフィクション!

2400円 590049-6



### 彼方なる歌に耳を澄ませよ

アリスティア・マクラウド  
中野恵津子訳

18世紀末、スコットランドからカナダ東端の島に渡った赤毛の男がいた——。カナダの「静かな巨人」が描く、愛すべき一族の物語。

2200円 590045-8



### 林檎の木の下で

アリス・マンロー  
小竹由美子訳

スコットランドの寒村から新大陸カナダへ——。三世紀の時を貫く作家自身の一族の物語。落ちついた声、天才的な筆捌き。12の自伝的短篇。

2400円 590058-8



### イラクサ

アリス・マンロー  
小竹由美子訳

一瞬が永遠に変わるさま。長い年月を見通すまなざし。長篇小説を凝縮したかのような味わいの、「短篇の女王」による九つの物語。

2400円 590053-3



### 世界の果てのビートルズ

ミカエル・ニエミ  
岩本正恵訳

笑えるほど最果ての村で、僕は育った。凍てつく川。薄明かりの森。そして手づくりの僕のギター! スウェーデンの傑作長篇小説。

1900円 590052-6



### 土曜日

イアン・マキューアン  
小山太一訳

ロンドン、午前四時。未明の空に火を噴く飛行機。テロか? それとも? 名匠の優美極まる筆致で描かれる、脳外科医の不穏な一日。

2200円 590063-2



### 海に帰る日

ジョン・バンヴィール  
村松潔訳

海に消えた少女の記憶が、今もわたしを翻弄する。荒々しく美しい、あの海のように。アイルランド随一の文章家のブッカー賞受賞作。

1900円 590061-8



### 千年の祈り

イーユン・リー  
篠森ゆりこ訳

長い祈りに支えられた父娘の縁。人生の黄昏にある男女の情愛……。オコナー賞、ヘミングウェイ賞ほか総なめの驚異のデビュー短篇集。

1900円 590060-1



**見知らぬ場所**  
ジュンペー・ラヒリ  
小川高義訳

父と母の、子供たちの、恋人たちの歳月。『停電の夜に』以来九年ぶり、世界待望の最新短篇集。フランク・オコナー国際短篇賞受賞！  
2300円 590065-7



**密会**  
ウィリアム・トレヴァー  
中野恵津子訳

早朝のオフィス、カフェの片隅の定席、離婚した彼女の部屋。秘めた二人の愛の決断とは。「英語圏最高の短篇作家」による十二篇。  
1900円 590065-6



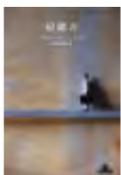
**ペット・サウンズ**  
ジム・フジリー  
村上春樹訳

恋愛への憧れ、父との確執、麻薬、肥満……。ビーチ・ボーイズの最高傑作『ペット・サウンズ』は、壮絶な戦いの記録でもあった。  
1600円 590064-9



**最終目的地**  
ピーター・キャメロン  
岩本正恵訳

ウルフアイの邸宅で繰り広げられる愛の物語。英国古典小説の味わいをも滑稽でエレガントな傑作長篇。アイヴォリー監督により映画化。  
2400円 590075-5



**帰郷者**  
ベルシルト・シュリンク  
松永美穂訳

帰郷した兵士が見たものは、なつかしい妻と、その後ろにいる見知らぬ男だった。『朗読者』の著者が積年の思いを注ぎ込んだ傑作長篇。  
2200円 590072-4



**記憶に残っていること**  
アリス・マンロー他  
堀江敏幸編

世界最高の短篇小説をこの一冊に。マンロー、トレヴァー、ラヒリ、マクラウド、イーユン・リー……創刊から10年間の全短篇集から厳選。  
1900円 590070-0



**シンメトリーの地図帳**  
マーカス・デュー・ソートイ  
冨永星訳

数学史上の知られざる偉業「シンメトリーの地図帳」完成とは。天才たちの息遣いとともに描かれる、美しき数学ノンフィクション。  
2500円 590081-6



**初夜**  
イアン・マキューアン  
村松潔訳

ずっと二人で歩いていけたかもしれない。あの夜の出来事さえなければ。遠い日の愛の記憶を克明かつ繊細に描く、異色の恋愛小説。  
1700円 590079-3



**通訳  
ダニエル・シュタイン**上下  
リュドミラ・ウリツカヤ  
前田和泉訳

ゲシュタポでナチスの通訳をしながらユダヤ人脱走計画を成功させた男。後にカトリック神父となりイスラエルに渡るその激動の生涯。  
上 2000円 下 2200円 590077-9,78-6



**黙禱の時間**  
ジークフリート・レンツ  
松永美穂訳

ギムナジウムで開かれた追悼式。遺影を見つめる少年に甦る、美しい教師とのひと夏の想い出。巨匠による、海に彩られた純愛小説。  
1600円 590086-1



**いちばんここに似合う人**  
ミランダ・ジュライ  
岸本佐知子訳

孤独な魂たちが東の間放つ生の火花を、切なく鮮やかに写し取った十六の物語。映画監督としても活躍する著者のオコナー賞受賞作。  
1900円 590085-4



**サラの鍵**  
タチアナ・D・ロネ  
高見浩訳

パリの女性記者と、ナチに連行された少女。六十年の時を越え、二つの人生が交錯する——累計三百万部のベストセラー。映画化原作。  
2300円 590083-0



### 週末

ペルンハルト・  
シュリンク  
松永美穂訳

テロリストが二十年ぶりに出所した週末。旧友たちの胸に甦る、恋、確執、未来への祈り。『朗読者』の著者が描くもう一つの「戦争」。

1900円 590090-8



### オスカー・ ワオの短く 凄まじい人生

ジュノ・ディアス  
都甲幸治・  
久保尚美訳

オタク青年オスカーの悲恋の陰には、一族が背負った呪いがあった。全米批評家協会賞・ピューリッサー賞をダブル受賞した傑作長篇。

2400円 590089-2



### 小説 のように

アリス・マンロー  
小竹由美子訳

夫を子連れに女に奪われた音楽教師。今は幸福に暮らす彼女の前に過去を思わせる小説が現れて——。「短篇の女王」による十の物語。

2400円 590088-5



メモリー・  
ウォール  
アンソニー・  
ドーア  
岩本正恵訳

記憶再生装置を手に入れた認知症の老女。ダムに沈む山村の人々。戦地でツルに会おう米兵。記憶をめぐる静謐で雄大な六つの物語。

2000円 590092-2



ソーラー  
イアン・  
マキューアン  
村松潔訳

太陽光発電でひと儲けを企む狡猾で好色なノーベル賞科学者。だが懲りない彼の人生にも暗雲が——。現代社会を笑いのめす傑作長篇。

2300円 590091-5

新潮 Crest ブックス

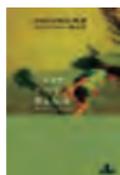
# 全点 カタログ Catalog 1998-2018



残念な日々  
デイミトリ・  
フェルフルスト  
長山さき訳

貧しく、下品で、誇り高い。のんだくれの父一族との少年時代。心をつかんで離さない、ベルギーの俊英による自伝的連作短篇集!

1900円 590094-6



ロスト・  
シティ・  
レディオ  
ダニエル・  
アラロン  
藤井光訳

ある朝ラジオ局を訪れた少年の手には、無数の行方不明者たちのリストが握られていた。ペルー系アメリカ人作家によるデビュー長篇。

2100円 590093-9



### 手紙

ミハイル・  
シーシケン  
奈倉有里訳

戦争に行った若者と残された少女。ふたりは百年の時を隔ててめぐり会う。死を超えて、時空を超えて綴られた、瑞々しい愛の手紙。

2400円 590097-7



タイガーズ・  
ワイフ  
テア・オブレヒト  
藤井光訳

「不死身の男」と「トラの嫁」。二つの物語が、祖父の人生の謎を浮き彫りにする——。本屋大賞翻訳小説部門第一位。驚異のデビュー作。

2200円 590096-0



### 女が嘘を つくとき

リュドミラ・  
ウリツカヤ  
沼野恭子訳

夏の別荘で、波瀾万丈の生い立ちを語るアイリーン。ところがその話はほとんど嘘で……。嘘をつく女たちの哀しくも微笑ましい人生。

1800円 590095-3



**夏の嘘**  
ベルンハルト・  
シュリンク  
松永美穂訳

避暑地で出会った男女。癌を患う  
大学教授。作家とその夫。小さな  
嘘をきっかけに秘められた思いが  
溢れ出す。著者十年ぶりの短篇集。

2000円 590100-4



**終わりの  
感覚**  
ジュリアン・  
バーンズ  
土屋政雄訳

精緻、深遠、洗練。四度目の候補  
にしてプッカー賞受賞。英国を代  
表する作家の、時間と記憶をめぐ  
る優美でサスペンスフルな中篇。

1700円 590099-1



**祖母の  
手帖**  
ミレーナ・  
アグス  
中嶋浩郎訳

サルデーニャの祖母が愛した「帰  
還兵」。イタリアの新鋭による、ひ  
たむきで官能的な愛の物語。美し  
い器楽曲を思わせる小さな本。

1600円 590098-4



**イースタリー  
のエレジー**  
ペティナ・ガッパ  
小川高義訳

繊細な情感。とぼけた味わい。さ  
まざまな階層のジンバブエの人々  
の日常をモザイクさながらに描き  
だした類まれなデビュー短篇集。

1900円 590102-8



**アンネ・フランク  
について語る  
ときに僕たちの  
語ること**  
ネイサン・  
イングラダー  
小竹由美子訳

コミカルな語りには深い倫理性。人  
間の普遍を描きだす啓示のような  
物語。フランク・オコナー国際短  
篇賞受賞作。

1900円 590101-1



**美しい子ども**  
ジュンパ・ラヒリ他  
松家仁之編

シリーズ創刊15周年を記念して、  
全101篇から選んだ傑作短篇アン  
ソロジー。ラヒリ、ミランダ・ジュ  
ライ、マンロー、シュリンクほか。

1900円 590104-2



**こうして  
お前は彼女  
にフラれる**  
ジュン・ディアス  
都甲幸治・  
久保尚美訳

どうしていつも、うまくいかない  
のか？ 浮気男ユニオールとたく  
さんの女たちが繰り広げる、おか  
しくも切ない九つの愛の物語。

1900円 590103-5



**もう一度**  
トム・マッカーシー  
榎木玲子訳

謎の事故で記憶を失い、巨額の示  
談金を得た男。失われた自分は、  
莫大な金で取り戻せるのか？ 絶  
賛と論争を呼んだ痛快な異色作。

2100円 590107-3



**ディア・ライヴ**  
アリス・マンロー  
小竹由美子訳

2013年ノーベル文学賞を受賞した  
短篇小説家が、透徹した眼差しと  
眩いほどの名人技で描きだす平凡  
な人々の途方もない人生の深淵。

2300円 590106-6



**いにしへの光**  
ジョン・バンヴィル  
村松潔訳

姿を消した人気女優と後を追う老  
俳優の、奇妙な逃避行。いくつか  
の曖昧な記憶が不意に新しい像を  
結ぶ。プッカー賞作家の傑作長篇。

2100円 590105-9

新潮 Crest-Books

**全点  
カタログ**  
Catalog  
1998-2018



**ハイウェイと  
ゴミ溜め**  
ジュノ・ディアス  
江口研一訳

『オスカー・ワオの短く凄まじい人生』の著者による伝説的デビュー作。全米最優秀短篇に選出された「イスラエル」ほか全十篇。

1900円 590004-5



**大いなる  
不満**  
セス・フリード  
藤井光訳

なぜか毎年繰り返される、死者続出のピクニック。平均寿命一億分の四秒の微小生物。不条理と笑いに満ちた圧倒的デビュー短篇集。

1800円 590109-7



**遁走状態**  
ブライアン・  
エヴァンソン  
柴田元幸訳

前妻と前々妻に追われる元夫。勝手に喋る舌を止められない男。明晰に語られる十九の悪夢。ホラーも純文学も超える驚異の短篇集。

2100円 590108-0



**光の子供**  
エリック・  
フォトリン  
吉田洋之訳

私の母は誰なのか——。パリを舞台に、映画と現実を往来するある男の愛の彷徨。ル・モンド紙元編集長による『フェミニン賞受賞作』。

1800円 590112-7



**甘美なる  
作戦**  
イアン・  
マキューアン  
村松潔訳

MI5の美人スパイと若き小説家。二人の愛は幻だったのか？ 自伝的で小説論的。ブッカー賞作家による野心あふれる恋愛小説。

2300円 590111-0



**低地**  
ジュン・バラヒ  
小川高義訳

インド民主化運動のなか殺された弟。その身重の妻をアメリカに連れ帰った兄。愛と失意が織り成す波乱の家族史。待望の長篇小説。

2500円 590110-3



**風の丘**  
カルミネ・アパーテ  
関口英子訳

古代遺跡の夢。ファシズムとの戦い。一族の秘密。イタリア最南端、風の強い丘に暮らす家族四代の物語。カンビエロ賞受賞。

2100円 590115-8



**善き女の愛**  
アリス・マンロー  
小竹由美子訳

誰にも覚えのある家族間の出来事を見事なドラマとして描きだす、マンローの金字塔の短篇集。1998年度全米批評家協会賞受賞作。

2400円 590114-1



**マリアが  
語り  
遺したこと**  
コルム・トピーン  
榎木伸明訳

母マリアによるもう一つのイエス伝。「聖母」ではなく人の子の母としてのマリアが語る、美しく果敢な独白小説。ブッカー賞候補作。

1600円 590113-4



**子供時代**  
リュドミラ・  
ウリツカヤ  
絵ウラジーミル・  
リュコフ  
沼野恭子訳

中庭のあるアパートに住む子供たちが出会った奇跡。「キャベツの奇跡」「折り紙の勝利」等、祝福されたかけがえのない瞬間に心打たれる六篇。

1800円 590118-9



**ヴォルテール、  
ただいま  
参上！**  
ハンス＝ヨアヒム・  
シェートリヒ  
松永美穂訳

尊敬と反発、女性関係に金銭トラブル。ヴォルテールとフリードリヒ大王の知られざる素顔を描く、笑いと驚きの新しい歴史小説。

1600円 590117-2



**突然  
ノックの音が**  
エトガレ・ケレット  
母袋夏生訳

しゃべる金魚。神様の本音。ままならぬセックス。そして突然のテロ——。イスラエルの人気作家の掌編集。オコナー賞最終候補作。

1900円 590116-5



文学会議  
セサル・アイラ  
柳原孝敦訳

小説家でマッド・サイエンティストの〈私〉は文学会議に出席する文豪のクローン作製を企むが、アルゼンチンの奇才が放つ衝撃作!

1700円 590121-9



べつの  
言葉で  
ジュンパ・ラヒリ  
中嶋浩郎訳

「私にとってイタリア語は救いだった」——夫と息子たちとともにローマに移住した作家が綴ったイタリア語による初エッセイ。

1600円 590120-2



あなたを  
選んで  
くれるもの  
ミランダ・ジュライ  
岸本佐知子訳

映画の脚本執筆に行き詰まった著者は、フリーペーパーに売買取断告を出す人々を訪ねる。カラー写真満載、心を打つインタビュー集。

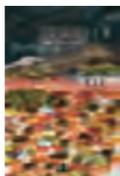
2300円 590119-6



陽気な  
お葬式  
リュドミラ・  
ウリツカヤ  
奈倉有里訳

自分のお葬式が愛で満たされるように願う亡命ロシア人画家アークの最期の贈り物とは——不思議な祝祭感と幸福感が溢れる物語。

1800円 590124-0



夜、僕らは  
輪になって  
歩く  
ダニエル・  
アラルコン  
藤井光訳

内戦終結後に再結成された伝説の小劇団。十数年ぶりの公演旅行は、ある嘘をきっかけに思わぬ方向へ。ペルー系作家による話題作。

2200円 590123-3



未成年  
イアン・  
マキューアン  
村松潔訳

輪血を拒む少年と彼を救おうとする女性裁判官。運命や信仰をめぐる激しい葛藤、恋にも似た思い。ブッカー賞作家による問題作。

1900円 590122-6



煉瓦を運ぶ  
アレクサンダー・  
マクラウド  
小竹由美子訳

その後の人生を一変させる決定的瞬間を、瑞々しい筆致で描き出す。故アリスティア・マクラウドの息子による鮮烈なデビュー短篇集。

1900円 590127-1



あの  
素晴らしき  
七年  
エトガル・ケレット  
秋元孝文訳

愛しい息子の誕生からホロコーストを生き延びた父の死までの、悲嘆と哄笑と祈りに満ちた七年。イスラエル作家の自伝的エッセイ集。

1700円 590126-4



屋根裏の  
仏さま  
ジュリー・  
オオツカ  
岩本正恵・  
小竹由美子訳

20世紀初頭、「写真花嫁」としてアメリカに渡った少女たち。そのささやきが圧倒的な声になって立ち上がる全米図書館賞候補作。

1700円 590125-7



四人の  
交差点  
トミ・キンヌネン  
古市真由美訳

異なる時代を生きた四人の喜びと痛みの記憶が、やがて一つの像を結ぶ。フィンランドで記録的ベストセラーとなった、ある家族の物語。

2200円 590130-1



すべての  
見えない光  
アンソニー・ドーア  
藤井光訳

若きドイツ兵と、目の見えない少女の心を繋いだのは、ラジオから流れる懐かしい声だった。ピュリツァー賞受賞作。日本翻訳大賞受賞作。

2700円 590129-5



誰もいない  
ホテルで  
ペーター・  
シュタム  
松永美穂訳

森の中の宿で。リノベーションされた工場跡地で。音楽フェスの夜に。心をとらえ、運命を動かす瞬間。スイス人作家による短篇集。

1700円 590128-8



**本を  
読むひと**  
アリス・フェルネ  
デュランテキスト  
例子訳

パリ郊外の荒地に暮らす文字を知らないジブシーの大家族と、彼らに本を読む喜びをもたらした図書館員。フランスのロングセラー!

1900円 590133-2



**ウインドアイ**  
ブライアン・  
エヴンソン  
柴田元幸訳

妹はどこへ消えたのか。それとも、妹などいなかったのか？ 滑稽でいてひどく切実な、不安と恐怖。『遁走状態』に続く待望の短篇集。

2000円 590132-5



**ジュリエット**  
アリス・マンロー  
小竹由美子訳

母と娘、そのまた娘。届かない互いの思いを諦観とともに描くアルモドバル監督映画化の連作など、ビターなマンロー全開の傑作短篇集。

2400円 590131-8



**ふたつの  
海の  
あいだで**

カルミネ・  
アマータ  
関口英子訳

ある日、姿を消した祖父。《いちじくの館》再建の夢はいかに——。イタリアの人気作家が描く、土地に深く根ざした強靱な物語。

1900円 590135-6



**ベリーの  
リンの  
永遠の一日**

ベン・  
ファウンテン  
上岡伸雄訳

イラクから帰還し、戦意高揚のショーに駆り出された兵士。過酷な戦場と愚かな狂騒の、その途方もない隔絶。全米批評家協会賞受賞作。

2300円 590134-9

新潮クレスト・ブックス

**全点  
カタログ**  
Catalog  
1998-2018



**五月の雪**

クセニヤ・  
メルニク  
小川高義訳

仄暗い歴史を背負う極寒の町マガダン。この土地で暮らす人々の哀しみと喜び。米国注目のロシア系移民作家による、鮮烈な連作短篇集。

2000円 590137-0



**人生の段階**

ジュリアン・  
バーンズ  
土屋政雄訳

悲しみの回帰線を超越して——誰かの死は、その存在が消えることまでは意味しない。公私ともに最高の伴侶を亡くした作家の思索と回想。

1600円 590136-3



**おじさんに  
聞いた話**

トーン・テレヘン  
長山さき訳

ハッピーエンドのお話はないの？ ロシア生れの祖父が語る悲哀に満ちた人生の物語。『ハリネズミの願い』の作家による愛すべき掌篇集。

1800円 590140-0



**オープン・  
シティ**

テジュ・コール  
小磯洋光訳

マンハッタンを日ごと彷徨する若き精神科医。時折よみがえる遠い国の記憶。数々の賞に輝いたナイジェリア系作家によるデビュー長篇。

1900円 590138-7



**階段を  
下りる女**

ベルンハルト・  
シュリンク  
松永美穂訳

名画とともに異国に消えた謎の女。消そうとして消せなかった彼女の過去とは？ 一枚の絵をめぐるドイツのベストセラー作家の新境地。

1900円 590139-4



**ファミリー・ライフ**  
アキール・ジャルマ  
小野正嗣訳

家族の暮らしを一変させた、あの夏の事故。意識が戻らぬ兄、疲労する両親、悲しみの中で成長する弟。愛情と祈りに満ちた家族小説。

1800円 590143-1



**ノーラ・ウェブスター**  
コルム・トビン  
榎木伸明訳

夫を亡くし、21年ぶりに勤めに出たノーラ。慎ましく不器用な主婦が、生きる欲びを見出してゆく姿を母に重ねて描く自伝的長篇。

2400円 590142-4



**運命と復讐**  
ローレン・グロフ  
光野多恵子訳

それは結婚という名の壮大な悲喜劇。巧みなプロットと古典劇の文学性を併せ持ち、オバマ前大統領も愛読した圧巻の大河恋愛小説!

2700円 590141-7



**知の果てへの旅**  
マーカス・デュ・ソートイ  
冨永星訳

宇宙に果てはあるのか。時間とは意識とは何か。科学をもってしても知りえないことは存在するのか。『素数の音楽』の著者最新作。

2700円 590146-2



**マザリング・サンデー**  
グレアム・スウィフト  
真野泰訳

メイドに許された年に一度の里帰りの日曜日、ジェーンの人生は自由の色に輝き始める。プッカー賞作家が熟達の手で描く珠玉の物語。

1700円 590145-5



**昏い水**  
マーガレット・ドラブル  
武藤浩史訳

70代後半を迎えたドラブルが、同世代の枯れない女たち男たちの老いの姿をいきいきと描く、まさに英国的苦みの効いた長篇小説。

2300円 590144-8



**ガルヴェイアスの犬**  
ジョゼ・ルイス・ペイショット  
木下真穂訳

空から巨大な物体が落ちてきて、村はすっかり変わってしまった。権威あるオセアノス賞を受賞。奇想天外なポルトガルの傑作長篇。

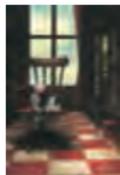
1900円 590149-3



**戦時の音楽**  
レベッカ・マカーイ  
藤井光訳

ベスト・アメリカン・ショート・ストーリーズに4年連続選出。戦争と音楽、幻想と歴史の間をたゆたう、短篇の名手による17篇。

2000円 590148-6



**憂鬱な10か月**  
イアン・マキューアン  
村松潔訳

胎内から窺い知る、まだ見ぬ人間達の世界。愛と裏切り、そして犯罪の気配。英国の名匠による、苦い笑いに満ちた極上の名篇。

1800円 590147-9



**変わったタイプ**  
トム・ハンクス  
小川高義訳

世界的名優は、短篇小説のおそろべき名手でもあった! 人生のひとコマを鮮やかに切り取る、優しさやユーモアにあふれた17の物語。

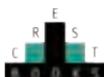
2400円 590151-6



**最初の悪い男**  
ミランダ・ジュライ  
岸本佐知子訳

愛するベイビー、いつになったらまたあなたをこの腕に抱けるの? どこまでも奇妙でなにより切実な愛に導かれた、感動の初長篇。

2200円 590150-9



キス

キャスリン・ハリソン 岩本正恵訳

旅の終わりの音楽

エリック・F・ハンセン 村松潔訳

アンジェラの灰

フランク・マコート 土屋政雄訳

ケンブリッジ・クイント

ジョン・L・キャステイ 藤原正彦・藤原美子訳

穴掘り公爵

ミック・ジャクソン 小山太一訳

巡礼者たち

エリザベス・ギルバート 岩本正恵訳

ネヴァーランドの女王

ケイト・サマスケイル 金子宣子訳

アムステルダム

イアン・マキューアン 小山太一訳

スコットランドの黒い王様

ジャイルズ・フォードン 武田将明訳

ジャイアント・ハウス

エリザベス・マクラッケン 鴻巣友季子訳

花粉の部屋

ゾエ・イエニ 平野勝子訳

グアヴァ園は大騒ぎ

キラシ・デサイ 村松潔訳

あなたが最後に

父親と会ったのは?

ブレイク・モリソン 中野恵津子訳

地獄のコウモリ軍団

パリー・ハナ 森田義信訳

ブルーミング

スーザン・アレン・トウス 斎藤英治訳

コールドマウンテン

チャールズ・フレイジャー 土屋政雄訳

天使の記憶

ナンシー・ヒューストン 横川晶子訳

愛の続き

イアン・マキューアン 小山太一訳

最後の晩餐の作り方

ジョン・ランチェスター 小梨直訳

ホワイト・ティース 上・下

ゼイディー・スミス 小竹由美子訳

パイロットの妻

アニータ・シュリーヴ 高見浩訳

逃げてゆく愛

ベルンハルト・シュリンク 松永美穂訳

最後の場所

チャンネ・リー 高橋茅香子訳

石のハート

レナータ・ドレストアイン 長山さき訳

その腕のなかで

カミーユ・ロランズ 吉田花子訳

アルネの遺品

ジークフリート・レンツ 松永美穂訳

アンジェラの祈り

フランク・マコート 土屋政雄訳

直筆商の哀しみ

ゼイディー・スミス 小竹由美子訳

あなたはひとりぼっちじゃない

アダム・ヘイズリット 古巣美登里訳

いつか、どこかで

アニータ・シュリーヴ 高見浩訳

遺失物管理所

ジークフリート・レンツ 松永美穂訳

ナターシャ

デイヴィッド・ベズモーズギス 小竹由美子訳

黄金の声の少女

ジャン＝ジャック・シュル 横川晶子訳

遠い音

フランシス・イタニ 村松潔訳

最後の注文

グレアム・スウィフト 真野泰訳

空高く

チャンネ・リー 高橋茅香子訳

大統領の最後の恋

アンドレイ・クルコフ 前田和泉訳

サフラン・キッチン

ヤスミン・クラウザー 小竹由美子訳

睡蓮の教室

ルル・ワン 鴻巣友季子訳

ナンバー9ドリーム

デイヴィッド・ミッチェル 高吉一郎訳

ガラスの宮殿

アマタヴ・ゴージュ 小沢自然・小野正嗣訳

バーデン・バーデンの夏

レオニード・ツィプキン 沼野恭子訳

ふくろう女美容室

テス・ギャラガー 橋本博美訳

博物館の裏庭

ケイト・アトキンソン 小野寺健訳

時のかさなり

ナンシー・ヒューストン 横川晶子訳

ディビザデロ通り

マイケル・オンダーチェ 村松潔訳

極北で

ジョージナ・ハーディング 小竹由美子訳

リリアン

エイミー・ブルーム 小竹由美子訳

ポート

ナム・リー 小川高義訳

夜と灯りと

クレメンス・マイヤー 柗淵博樹訳

奪い尽くされ、焼き尽くされ

ウエルズ・タワー 藤井光訳

無限

ジョン・パンヴィル 村松潔訳



[www.ippodo-tea.co.jp](http://www.ippodo-tea.co.jp)

Every cup is an open door.

物語のように広がるお茶の味。



**Tokyo**

東京都千代田区丸の内3-1-1 丸の内仲通り国際ビル1階

**Kyoto**

京都市中京区寺町通二条上ル常盤木町 52

**New York**

125 East 39th Street, New York, NY 10016, U.S.A.